齊諧俗談

全

第　號
齊諧俗談
冊數　一冊
著者　大朏東華
出所　不明

イ 5
1616

齋諧俗談序

梁呉筠所著齋諧記者載怪異書也蓋齋諧者元依荘子寓言也山海經之類亦然矣今世此書者和漢

門 號 1616 巻

史傳之中渉獵其怪
異者集之而名以齋
諧俗談而爲消譴自
娯一日書林文蘦堂
問予席上閲之而乞
鏤梓以流布於世雖

然怪力亂神者聖人
之所誡且懼傳寫誤
多固辭而不許然此
書素據史傳而以著
其事實曾無世人虚
妄之談敢謂非不佞

罪而屢乞不已於此不得辭則與之而以書其旨趣巻端爲之序爾云大胐義道書

齊諧俗談巻之一

目録

降月桂
星變人
非常雷
降怪雨
河伯使者
一目連
流沙川怪風
久丸神事
池社
星隕成石
天狗星
降石鏃
降怪雹
靈水
南越颶
二山雷狩
鶏坂神事
龍馬神
袋星
大白虹
天泣
大垂氷
妒女泉
水鬬
貝寄風
高月輪
三輪拝殿

戎嶌蛭兒宮　熊野連哥　愛宕山鳶
金毘羅忌穢　竈神　金剛力士

齋諧俗談巻之二

目録

性空上人畫像　弘智法印枯骸　役小角縛神
勝尾寺觀音　法泉寺一切経　補陀洛寺水葬
前出地藏　津軽舎利　鏡中觀音
蟠滿寺　伶人濵主　伶人助元
名畫精神　箕術妙　伏見翁
角異　射柳　王猛鬻畚
大聲人　男夫産子　倚人
異相人　半男女　閹人
男變女　女變男　瘖瘂

白子　侏儒　無手人
失歸妖　人妖　長乳婦

齋諧俗談巻之三

目録

怪産　孩兒吸出乳　痘瘡之起
大峯鬼　大神人　豆藏
肅慎隈　飛頭蠻　大食國
長臂國　長脚國　小人國
崑崙奴　酒魔　病忘人
鸚鵡瘴　貝母治悪瘡　劉寄奴草
藍澱治噎疾　無名異之功　鷹聲虫
青蚨銭　金中虫　蝦夷沿金
鞋靼舡寄異　仙遊山　鴉鶻樓

聚寶盆
火浣布
七難揃毛
倉橋山鏡
川越名號
法隆寺瓢
怪鏡
右馬頭之市
海人焚殘
尾花馬市
辟寒金
百合若丸之弓
鳴門大皷
鳥化成美女
童謠
鶯囀和哥
白狐尾
古塚怪異

齋諧俗談巻之四

目録

縣守淵
鬼彈
加牟末牟淵
三途川死出山
僞橋
鵜瀬淵
夢野
禁野
八尾木
酒滴池
耳梨池
檝竿
處女塚
濡衣女墓
雁卒都婆
黄耳塚
嗣信石碑
宇治石塔
石成崇
石油
石麪
巓頭岩
子持石
屎局石
燃石
照石
平盤

勇龍石
天涯石地角石
洞其石
女郎石
神石
桂石
神代桐樹
龍燈松
神山藤
霹靂木
桐人
芭蕉花
大款冬
八葉橿
紫竹林
八房梅
三度栗
弟切草功能
屈軼草
菌之毒
白蝙蝠之毒

齋諧俗談巻之五

目録

怪鴟
犬盡忠
塚本狐
貉成怪
馬生角
黒眚
大熊
胡獱
海中鼠
麝香鼠
猴王猴夫人
山童
山鬼
彭侯
土中鶯
鴛鴦執心
赤鳥
鵂子鳥怪
鳳五郎
食犬雛
長鳴雞
鴉鮓
姑獲鳥
天狗
龍升天
出蛟
霊亀

三足龜　　天蛇之毒　　野槌蛇

海坊主　　擁劔蟹　　獨螯蟹

思蠻　　大蟹　　渡り貝

貝鮹　　人魚　　琵琶湖鮎

湯中赤魚　　鯔変獺　　豆賀夜

蜻蛉蠶蚕　　蛭成害　　蠅成群

蝦蟇合戦　　大蚯蚓

齊諧俗談巻之一

東都　大朏東華　著

降月桂

唐書に云垂拱四年の三月台州に月の桂の實降事ありと云ふ又宋の仁宗の時天聖卯の年八月杭州の靈隱寺に月の桂の子降事、つゝも雨の如く拾ひて帝へ奉れ寺僧これを地に種て二十五株を得たりと云

按ずれに時珍の云呉剛月の桂を伐の說ハ隋唐の小說より起て月の桂の子を落の說ハ武后の時より起れりとぞ

星隕成石

陸奥出羽の両國の内にて或夏の夜晴れたる時星の
落る事ありて其かたち流星の如く白き光を引て
走りて落るかくの如き所凡五六ヶ處ほどありて屋根よ
り下へ見へ候其落たる所に物ありて形葛籠の如し
是を星屎と云餘の月ハ多く雪になる故へ不見え候
他國にてハ曾てなしと云
大明の萬暦子の年十二月廿五日四川の順慶府にて
風もなく雲なふしてたちまち迅雷鳴ける中に石を落
事六塊其の重さあるひハ十五斤小きは一斤或ハ八十
餘両と云なし東國通鑑に云高麗の文宗王の

時正月黄州へ石の落る事ありて其声雷の如し
則ち其の落る所の石を文宗王へ奉れハ禮司奏して
云ひけるハ秦の時に星の落る事ありて晋唐より
このかた此ことしてあり是ハ稀の変なり災なり
なりとぞと云て遂に其石を返れしと云

袋星

或書に云孝靈天皇の三十六年正月倭迹日襲
姫夫なくして妊み終に怪き児を産す其子
かたちに其胞袋の中まるにして玉の如し其中に男
ありて透通りて見ゆ胞袋を破んとすれども
破れず其の夜飛んで天に昇りて星となる今

銀河に有袋星すつまとなりと云
按ずるに袋星といふはいづれの星なれ事しれざれど
うけぼしは天津天籥の類ならんか

星變人

聖皇本紀に云敏達帝の九年土師の連八嶋と云
人なりよく歌をうたふ事人に越たりされば毎
夜いづくともなく人来りて八嶋と共にうたふ歌を
唄て挍ず其音声常にあらざれば八嶋これを怪しみ
其人のかへるさにしたひて尋見れば住吉の濱辺
にいたる暁に及び此人海へ入てうせぬ聖徳太子
この事を聞たまひて正しく螢惑星なり此星あまくだりて
降りて人となり嬰兒の中に交りあそんで謡歌を唄ひ
未然の事を唄ふなりかくの如く傳ふ一説に八嶋は其子を
大にして能いふ事をうたふ螢惑星かの歌を感じて
相ともに唱ぬ

我宿の夢まてめる声はたそ随に名をまで四方の草とも　八嶌

天の原南にすめる夏火星豊里にも四方の草とも　星

夏火星とは螢惑星なり豊里とは聖徳太子の別号
なり

宋史に云永安二年雅子どもと大勢ひしめかうて挍ず事
あり其中にきく人の小兒たちゆき化来て云我は人に非
螢惑星なりと云終りて飛びあがれといふ

天狗星

日本紀に云舒明天皇の九年二月十一日に大なる星東より西になかれ其声雷に似たり僧旻の云是星にあらず天狗なりと此年蝦夷叛て兵船来るとぞ

大白虹

霏雪録に云越の國に陸國賓と云道士有ある時船に乗て江にわたるに白き虹の水に蹲まるを見る甚近付て其形を見るに蝦蟇の大さ笋笠の如くなるが白き気を口より吹出してしばらく有て跳て水に入る虹とやし共に見えずと云

非常雷

日本紀に云舒明天皇の十二年正月十二日天に雲なくしてあめ大きに雷鳴すと云

太平御覧に云秦の二世元年天に雲なくして大きに雷鳴す雷ハ陽なり雲ハ陰なり是を君臣に象る今人を恤まず人臣まさに叛く故なりと云

降石鏃

三代實録に云光孝天皇の御宇仁和元年六月二十一日出羽國秋田の城中および飽海郡の神宮西濱等へ石の鏃降る同二年の二月にも飽海郡の諸神社の辺に石の鏃ふると云

按ずるに出羽國飽海の神社にハいつも此事

有りし禾山翁の里人談に見えたり

天泣

前漢書五行志に云中和三年淅西にて天の鳴音磨をひくが如くにして止む是を天泣と云しかも雲なくして雨降ることを天泣と云とぞ

降怪雨

和漢三才圖會に云元禄十五年の九月連日綿を降る事あり己午の時晴天にして日の光赤氣を帯ぶ其物ありて日輪の中より出るが如く飄て然として降て墻壁にかゝる其形蜘蛛の糸あるひは蓮の糸のやうにて綿糸に似たり色白く長さ二三尺ばかり試に是を焚に香なし切て見るに脆くしてさながら何物と云事を知ずと云

五雑俎に云天より毛を降し土を降すは類史傳に多し元の至元四年土を降す事七昼夜に至て深さ七八尺牛馬これがために尽く没死すと古代にありと聞ざる所の災変なりとぞ云

降怪雹

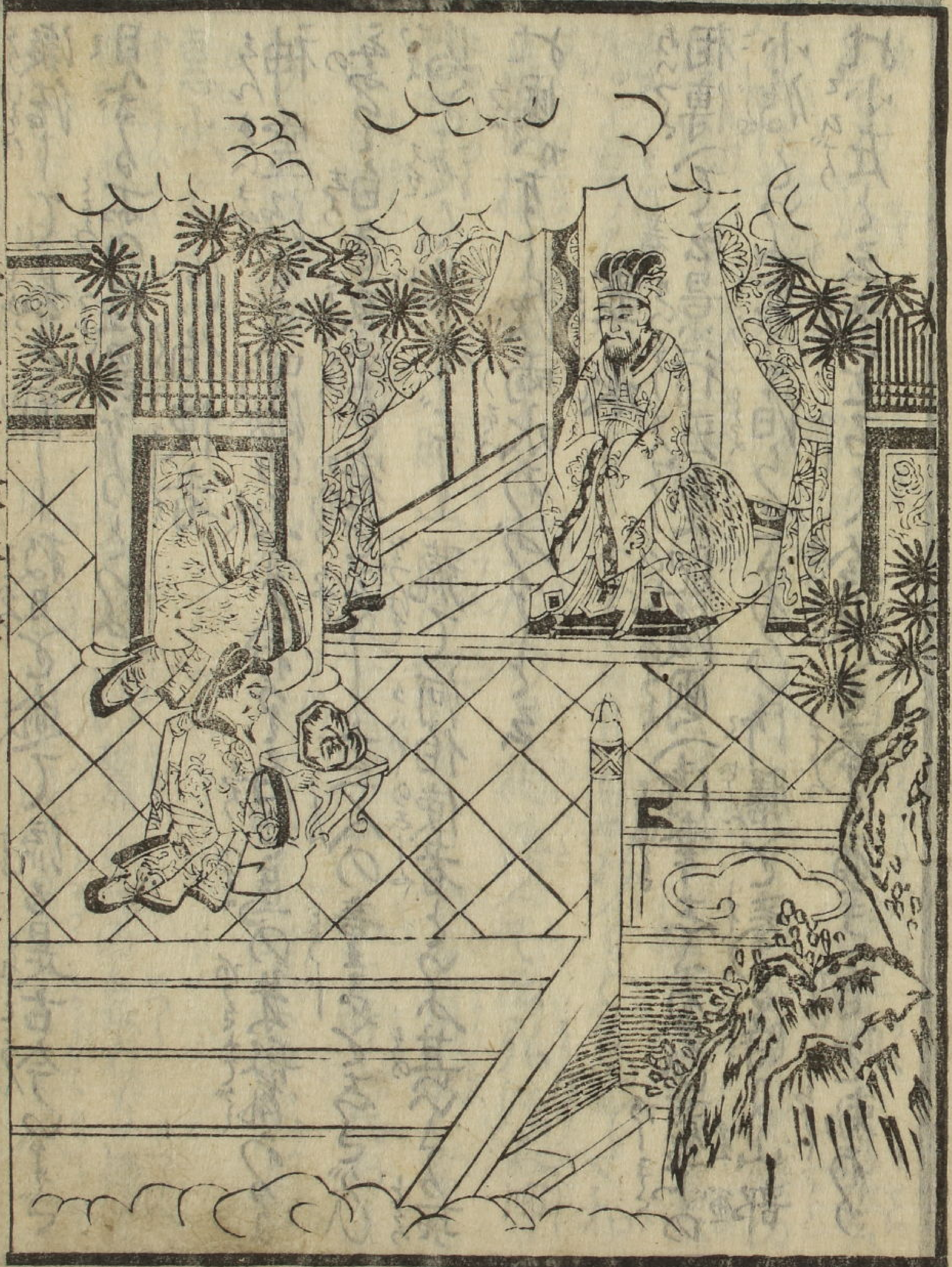
和漢三才圖會に云元禄十五年五月十六日の申の刻越に雨降雷鳴して黒雲おほひ重て雹を降る事有摂津国より始て河内国を経て大和の国にて止乾より巽に至て斜なり其間六七里其横八幾に

一里にあまりて大なる物は頭首て尾のかたちの如くあるひハ鶏卵のごとく小なるものは蓮の実の如し是に当るる人は頭に創をうけ民屋を破る此間ちかく一時ばかりにして晴るといふ

宋の熙寧の頃河州にて怪しき雹降る其かたち人の頭の如く耳目口鼻皆そなはる事刻なせるが如しといふ

大垂氷

五雑俎に云正徳年中順天府の文安県の水たちまち起る此日大きに寒くにはかに凍て氷柱となる高さ五六丈にあまり四囲其の中うつろにして傍に穴あるを



瀬結して甚く固し数日を逾て流る是古今いまだ
見ざる所の怪異なりといふ

河伯使者

神霊録に云四海の上に人あり白き馬の朱鬣なるに
乗り白き衣玄き冠を着し十二人の童子を従ひ
馬を馳て飛が如し号て河伯使者といふ其いたる所
此国かならず大雨水ありと云

霊水

相傳へて云景行天皇肥後国へ御幸ありし時の
小嶋といふ所に泊らせ給ひ御膳を奉る時に山部阿弭古の
祖小左と云者を召て冷水を奉るべき旨を勅あり

于時嶋の内に冷水なし則小左天地の神に祈誓
をかけて冷水を得ん事を祈ければたちまち傍の
岸陰より寒泉涌出るを汲て奉る因て其
嶋を号て水嶋となづく今に其泉ありと云傳ふ和
泉国槙尾寺に霊水あり相傳へて云弘法大師
此寺に御座しし時山院の地せまく当寺用水なきを
自由ならざりしかバ文を咒して水を呼びたちま
ちに湧出る其水今に至て流る土俗其の水を智
恵水といふと云
幽怪録に云夷道県の句将山の麓に三の泉あり傳て
云むかし此所の者水を汲の遠きを苦て人て

八年を實ふ其の中に老人の姦あり孤貧にして襤褸を着て產業なし去るに一人の老人あり其かたち甚醜身肉に瘡を生じて膿を拵ての身見る人忌嫌ふといふ事なし唯此の女子ひとりあはれみをとく之へ飯を分て是を施し喰しむある時食を喰しむる時かの老人食し終て云我汝が善行を感じ恩を謝せんと思ね何をか求むるやと問ふ女子答て何を報をまん其うへりとむる所人の能得る所にあらずと云老人又問て何をかおかると女子の云孫ごとくは此山の麓にあたる所らば孝使わらんとかの老人其時腰より小刀を取出して山の下を三所ささせば忽ち泉涌出るかの老人ハ

忽然として身見へ次と云ふ

妒女泉

摂津國有馬の温泉は傍に後妻湯と云あり人是に向て罵はそのまま此に湧上る是忿恚の所為なり又まさと後妻湯とよぶ由なくと云傳ふ駿河國江尻の近所に嫗が池というあり相傳へて云往昔一人の女あり其生質頑妬にして文禄二年八月八日此の池へ身を投て死すと人其池の邊へ至て嫗とよべバたちまち泡湧かへるなり大きに呼バ大きに湧事甚し寰宇記に云安豊之郡の蛇泉ハ浄戒寺の北に有其泉の邊に至て大きに呼時ハ大きに湧小く呼ときは

ハしく瘡とし是を咄されハ其瘡事いよ〳〵甚
世人さゝまを怪みて咄泉と號くと云

一目連

伊勢尾張美濃飛騨の四ケ国において不時に暴風吹來
ゑて枝を倒し巖を崩し民屋を破る事あり然
されども唯一路にして其外の所を吹ず是を一目連と名
付る神風とハ則伊勢國桑名郡多度山に一目連
社祠をまつれる傳く相模國にも是に似る風あり猶
風と名付駿河國にも有悪禪師の風と名付土俗
傳て云其の神の形人の如くにして禍をの禱をと云
悦とよ

按ずるに蝦夷松前にて十二月嚴寒の時節晴天
の折から忽ち凶風吹事あり自然道路をゆく人是に
あへば卒然として倒れ伏かならず頭面あをひ分て
足のうらにみな手ごろの疵を蒙りて死す
いふる程の事ハなし俗に是を鎌閉太刀と云
茱萸のけと傳まへ即愈甚おゆく全瘥の如し
此事津輕の地にも間に有と云今極寒の時ハ猛毒
ふしても一目連と同からざれ皆悪氣の風なり

南越颸

南越志に云颸ハ四方の風ふして常に五六月に起れ
其起る時ハまさる風の起らさる先に鷄犬のたぐひ鳴事

あらんとぞ

水闘

宋史に云高宗の時紹興十四年楽平県の河決田を衝事数百頃田の中れ水おのづから起立て物のために吸るゝ如し地より高事数尺おして隄防とをしれバ水をのづから行けバ里南の家に有井の水を高さ丈数尺に積る事虹の如く其声雷霆の如くにして墻を穿楼を崩さるの出二の水杉墩といふ所にて戦ふ且すゝみ且退十餘刻にして戦止でおのゝく其所へ帰ると云られ誌海記にも水闘の事を載すり

流沙川怪風

相傳へて云流沙川にハ夏の間熱風多くして毛し猿人此風にあへバたちまち死ス其風ふかんとする時ハ駱駝と云獣あつまりてかならず集鳴て口鼻を沙の中へ埋む人是を見て其風の至る事を知るといふ

二山雷将

安房国に二山といふ所あり此所にて毎年の正月里俗群集して雷将といふ事をなす鼬の如なる獣を多く捕て殺す其年の夏多く雷鳴する事稀なりとし将獲ざる時ハ其年雷鳴多しと云

貝寄風

摂津国天王寺にて毎年二月廿二日に聖霊会

もあり其日は舞楽ありて餝に大なる作花を用ゆ其作り花に小き螺の貝の殻を餝る寺中の役人住吉の濱に出て是を拾取ることなるに毎年二月十八日暴風吹て後かならず此貝を吹寄ると云

久丸神事

参河国神戸村といふ所に久丸大明神の社あり毎年正月初の申酉の両日祭礼あり此日は生土七郷の人家並に戸を閉て出入をせずと云猶さ摂津国西の宮の恵比須ふも正月十日祭礼有て村民九日の朝より夜に至るまで戸を閉て出入をせず是を居籠といふ

鵜坂神事

越中国に鵜坂明神と云有此祭礼には神主神の杖をとりて婦女を打但し打事其女の男にあひし数にまさぐると云近江国筑摩の祭は類なりとぞいふ

高月輪

信濃国に小田井といふ広き野あり此野の中に草芝生ば自輪のかたちの如く丸き所あり其所へは雪霜を降ば其輪は太さ三尺斗にして径一町ばかりなり土俗其所を高月輪といひ伝へていふ此野のむかふに山あり本幡山と云其峯に権現の

社なりとの神馬にのりて毎夜此所にあそび
給ふを時として嘶の音聞ゆとぞ

池社

遠江国笠原庄櫻村に池の社とて二の池あり男池女池
とて方五町斗の池なり櫻が池とも云池の社ハ牛頭
天王なり毎年八月彼岸の中日午の刻に半切桶
に赤飯を盛て水練の達者なるもの是をおしゆく
池の真中と思ふ所に押ながし其身ハむなしく
岸にあがりけるに暫時に池水うづ巻て其飯器水底
にしづむなり此飯器其の救定られ願をかなふ
三七あるひハ五年くに増減あるなりとの事　遠山

翁の里人談ゑとも見へたり相傳へて云往昔当国の国主
京都より初て入国の時妾と共に此池のほとりに遊興
まて（妾の名を櫻の前と云国主の姓名を失へり）時に儀ふ逆浪動揺しけるかの妾
を池へ引入まて行方をしらず国主大きにいかり国中
に芝薪を集て数万の人を焼池の中へ投入る事七日
七夜斯て池の水黒くなるに変じてまた青くなりけるか
後には血の色に湧上り一の毒蛇死て浮ぶ其かしら
頭ハ牛のごとく背に黒き鱗ありて白き角を生ず
見るもの恐怖せずといふ事なしとかや云肥後
の阿闍梨白山皇圓と云ふ僧の霊魂此池に入るとも云

龍馬神

摂津国多田庄波豆村に普光山普明寺と云寺有
此寺の什物に馬の頭あり相傳て云康保四年の
冬源の満仲公能勢の山に猟し給ふ時に竜女
来て云川下の池に大蛇有て我に仇をなす事数
年なり願ハくハ君退治したまへとて一の龍馬を奉ると
夢見給ひて覚て見給へハ果して一の馬側に有満仲
公奇異の思ひをなし給ひ其馬に乗てかの大蛇
を伐亡し給ふ其後満仲公逝去の後御孫満信
に至るまで其の馬を秘しけるが終に死け
る家臣藤原の仲光と云者其馬の屍を則山岳
に埋其上に一宇を建て駒塚山峯の堂と号ス其後

後土御門院の文明二年三月十八日より夜毎に駒塚より光出て普明寺に輝く時に住僧玉岩和尚駒塚に至て普門品を誦れたちまち雷鳴ありて馬の頭出現れ玉岩和尚是をすなはち携帰て金堂に納め龍馬神と號くと云

三輪拜殿

奥儀抄に云大和國三輪大明神ハ唯一の鳥居二の鳥居樓門拜殿なりぶして神殿ハなし里人神殿のなきを訝かりて神殿を造営し時より多くの鴉むらがり来て其材木を啄きちらす其うへ其あたりの木の在所を去りしは因て此神ハ社

此好をたすくれバ此と云事を知るとかや

戎嶋蛭児宮

和泉國戎の町の濱に蛭児宮あり相傳へて云寛文四年八月八日に始て湧出る嶋なり同十一月十三日一ツの大亀うかミ出る長さ四尺二寸幅四尺あまりを捕てやしなひ酒を飼ける其亀ニ二日を経て死れきすなはち嶋の中へ埋む観月院頼辨法印是を崇て辨財天とれまつると云此海中に石像の戎ある故に戎の字を其町の号とする事久しと周てくるが多く海に入て捜求むれ果して十二月朔日石の戎の在所を得て是を舁上る其の丈三尺八五寸幅

三尸人石子さ三尺七寸今ニ苔を生し貝殻粘えめ
殊勝の像なり則宮を造て亀の祠となし給と
亀と我の三像の内ゟ出る事近世希有の神霊
なりと

熊野連哥

紀伊國熊野權現の本宮の禮殿にて毎年正
月二日社家と地下の人と相催して百韻の
連哥興行ある其發句ハ往古神詫の句なりと
そ

さいの山の行ゟハ花の木陰かな

脇の句より起る脇の句ハ尾崎氏の某謄奉る

とそ

愛宕山鳶

或書ニ云天人熊命化して三軍の幡となる其の
後神武天皇長髄彦ゟて戦ひたまひて勝かたし
時ニ金色の鳶飛来て天皇の弭ニ止る其かゞやき
流電の如し因て敵軍ハ遂眩て天皇ニ従て
むすひて曰いづもの神ぞ奏して云天照太神
の勅を奉て鳶ニ化して来る吾此國ニ住て
軍戦を守らんと思ふに向ふ所は何の所ぞ
住むべき思ふ奏して云山背國怒兒の山ニ住居
しかと因て其山ニ住せしめ天狗神と頌せし

ひゆくつみ

金毘羅忌藏

讃岐國鵜足郡金毘羅權現の山に天狗有其名を金毘羅坊と云是を祈て霊験いちじるく博く崇る所と甚し毎に参詣の人忌嫌を禁ぜざるに他に異なる事あり

斷　蟹 五十日　川魚并蒜 三十五日　海藻 三十日

斷の通り定なりと云

竈神

五雜組に云竈神は其形美女の如し名を隗と云姓は張字は子郭夫人に六人の女あり常に月の晦に天に昇りて人の罪を白す其罪大なるものは紀を奪ひ小なるものは筭をうばふと云

金剛力士

秦の始皇の時天竺より寶利房なんどゝ云沙門彼是十八人來りて長安と云所に居るきられに始皇さゝきを悉く捕て獄中に繋しむ其夜金剛力士來りて獄の墻を破りて是を悉く出しまゐらせけるとなん

齋諧俗談巻之一　終

齋諧俗談巻之二

東都　大朏東華　著

性空上人畫像

著聞集に云花山法皇書寫山に御幸ありて性空上人に御對面の内ひそかに画工に仰せて上人の像を圖せしむ時にたちまち化山うごき地震す法皇恐怖ましましける上人の云怪しむ事なかれ我が像を寫さしむる故にこそあれ而已と且て上人の面に小き痣ありし画工其痣をもらしていまだ圖せずかの震動におどろき持たる筆を落し墨の飛し所さながらに痣の形に異ならざれば皆人これを感んじて此像いふふ

書寫山の寶藏にありと云

弘智法印枯骸

越後國三嶋郡野積村に海雲山養知院といふ真言宗の寺あり是の寺に弘智法印の枯骸あり相傳へて云弘智法印は小玉氏にして下総國山桒村の人なり嘗て高野山に登り密教を修め後に當國の大浦蓮華寺に住し貞治二癸卯の年（第九十六代後光嚴帝）十月二日岩の上にて寂す其かたち合掌して肉身腐らず辞世にて

いは坂の主ハ誰ぞと人とハゞ墨繪に書し松風の音

あるひと試に鎗の鐺にて其肋を突く者あり此時より少し傾くとぞ

役小角傳神

役の小角ハ大和國葛上郡茅原村の人なり舒明天皇の五年正月朔日に生れ稚して敏悟博学なり三十二歳の時家を棄て葛城山に入て居る事三十餘年藤葛を衣とし松の葉を喰て常に孔雀明王の咒を唱へ嘗て雲に乗て遊行し鬼神を驅て使令とし或る時山神に告て云葛城山の嶺より金峯山に踰るに其間危険なり汝等石橋を架て行路を通ぜよとて諸の神命をうけて夜毎に岩石を運で是を営構

も小角叱て云何ぞ早くなさゞると對て云葛城の
峯の一言主ハ神その形ちいと醜く晝ハ出て役
をなしがたく夜く出て役をなす因て遅
しと云小角怒りて忽ち一言主を促ぐ一言主うけ
これ小角いかりて咒縛なし一言主を深谷に繋ぐ
と云

勝尾寺觀音

攝津國豊島郡池田の庄の艮に應頂山勝尾寺也
此寺のはじまるは釈の妙観作の千手觀音なり
光仁天皇寶亀八年の建立なり相傳へて云一條
院の御時正暦元年に台列の周文德務列の揚仁
紹といふ商人二人筑紫太宰府に来りて云百濟
國の后妃ある人其齢ひいまだ白髪となる醫術
を尽くせどもそのしるし験なし或夜の夢に日本國
の勝尾寺の觀音を祈るべし則志願を起こ
して祈念し果して白髪変じて悉く黒髪
なる事もとの如し因て風伽の業なしびに金鼓
金幢等を二人に持せて是を送るといふ
按ずるに本朝一條院の御時正暦元年は中
華の太宗淳化元年にあたる

法泉寺一切経

月潭和尚の岐山草稿に云肥前國須古庄に法

泉寺といふ禅宗の寺あり元禄三年庚午の春
此寺の住持一切経を買めんとして郷里を勧化
れけるに或夜の夢にいづくともなく一疋の馬来
りて人のごとく言語をなして我ハ当国白石の庄
何某が家に畜れし馬なり今度住持の建立する
所の蔵経勧化の中に入むと云住持の云汝何の財
物ありて勧化へ入むと馬の云我毎日に一度づゝ
物を負て市に出て賃銭を得ると主の生計也
すれバ其より後一日に両度完出なば其銭若干あ
らん是を用て寺に寄附せんと思ふ而已と云て
夢さめぬ偖次の夜の夢にも前のごとくきたり爰
にきたる住持怪しミて則白石の馬主が家に行て件
の夢の始末を語れバ馬主も大きにおどろきて我も
偖さ夕べ夢みし所斯の如し也則かの住寺を伴て
厩に入れバ馬ハ彼僧を見て喜躍する事たゞならざりし
因て馬の稼ぐ所に随て賃銭の餘蓄を寺う
納遂に其馬を放り馬とは則法泉寺へ入て養
事年ありて是を聞者感歎せずといふ事なし
其後ほどなく蔵経悉く調と云

補陀洛寺水葬

紀伊国那智濱の宮渚の森に補陀洛寺といふ
真言宗の寺ありて当寺の住持ハ代く臨終の時

よかんで船に乗て寺のむかひの網切島とて離れし島まで到て則海中へ沈葬るなり是往古よりの旧例なり曾て云補陀洛観音の浄土へ往しむるなりと云傳ふ

前出地蔵

相模國鎌倉米町の西に延命寺といふ浄土宗の寺あり此寺の本尊ハ地蔵菩薩なりしかるに此本尊の形裸の立像にしてしかも女陰あり雙六盤を臺座として衣を召せ開帳の時ハ其女陰を出すゆへに前出の地蔵といふ相傳へて云往古北條時頼の婦人雙六の勝負をあらそひて裸になさん事を賭にしけるに其婦人勝負にまけける時に一心に此の地蔵を念じ地蔵菩薩其の女の形に變じ忽婦人にかはりて奇異のわざをなし而して則其形状を造て此寺に納むといふ

津軽舎利

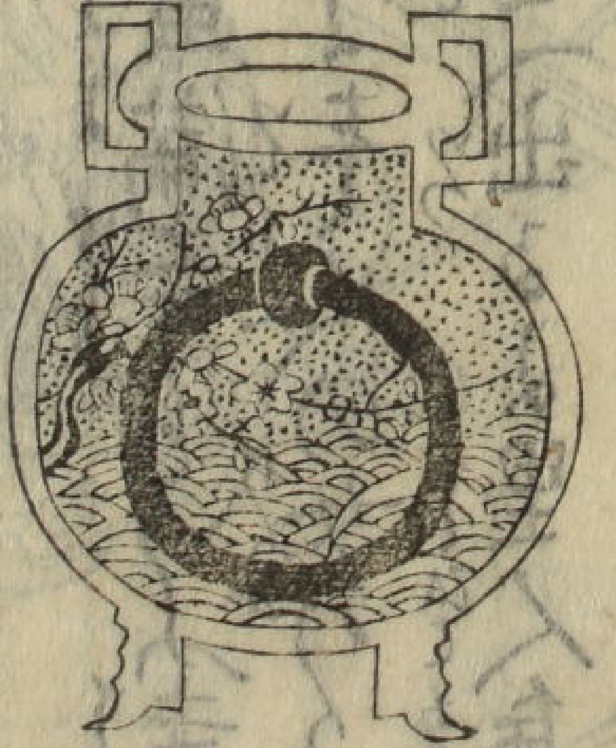
陸奥國津軽今別の海邊に奇石あり其石たるとの八峯のごとく白色に薄赤き色を帯たり破く珠の形となせば精瑩玲瓏として甚だ小きこと小豆粒の如く白色にして光あり是を津軽舎利と名付て宝塔に納頂禮恭禮なすをばたまくに殖ることの有といふ

鏡中觀音

元弘釋書に云相摸国鎌倉に巨福山建長寺といふ寺あり此の寺の什物の中に開山大覚禅師所持したまふ鏡一面あり大覚禅師入寂の後此の鏡に禅師の影をうかび其かたち觀音の像に似たりしゆへに鏡中の觀音といふ又北條時頼このことを聞たまひて鏡を磨しむるに其のかげ消しかば幽にかすかなれども一磨の後鮮明なりして大悲の相すがたそなはれり時頼悔謝して禮をなせりといふ其の後寧一山この記をしるせり

鏡面

鏡背



新編鎌倉志に云圓鑑一面厨子に入て西来菴にあり高さ三寸五分横三寸なり鏡の面に觀音の半身の像ありて手に團扇を持かし俯く如し頭に天冠をいたゞき瑤路を垂る珠をつらぬく線なし眼に瞳を入ず鏡の後ハ水中に三ケ月の影その高さ半分ばかり上に梅のえだ有ちまき等はこれ鑄形なり鏡の形鼎の如くに

志そめ衰ありやと云傳ふ尾張國名護屋に七寶
山聖徳寺といふ寺ありて此寺の什物にも鏡
一面あり親鸞上人所持の鏡なり徑一尺五寸
斗ともいふ異朝より来る常に親鸞上人手に
觸たまひ遂に師の面貌かゝりうつりはて今にい
たもて然て其後ちう縁てふ是を琢とも消れ
せずといふ

盤滿寺

山城國相良郡綺田村に盤滿寺といふ寺有
相傳へて云往昔當國綺田にきく人の女あり其
家佛を信仰を一日きの女里へ出るに里人集て

池の蟹を多く捕を見て問て云何のために蟹をとるやと答て云是を煮て喰むがためなりと女の云我家に味よき肺臾あり蟹と取かゑんやと里人大きに喜で是を替けり女ハ其蟹を悉く大池へ放して帰る其次の日彼女の父野に出て蛇の蟇を呑を見て云汝蟇をはなち去無しとあらば我娘を汝にあたへんと云蛇則蟇を吐て去る其夜何国ともなく壮夫来て門を敲て昼の契約に因て来ると云老父おれどゆるさゞれば此事を娘に告れ先帰てのち三日ありて来る無しと蛇をれハち去るかの婦此

有様を聞てなど狭く気をもちて閨に籠佛前に向ひて讀経に呆して其期におよんでかの蛇来りて尾にて戸を敲きければ閨に入る父母おそれて哭泣顛倒して里人に此事を告れ里民きたり集て戸を開て見ればかの女ハ安然として恙なし去るにかの蛇ハ数萬の蟹来りて蛇の全身を螫て蛇ハ死してぞありける人々奇異の思ひをなし其所に寺を建立し蟹満寺と号くといふ近きころかの寺を修復の時本尊の座の下に数萬の蟹の殻と蛇の鱗出けりといふ

伶人濵主

五十四代仁明天皇の御時に伶人尾張の濵主といふ者ありその齢すでに百十三歳にして舞曲の形義が年の如し帝これより濵主を召て清冷殿のまへにおゐて長壽楽といふ舞楽を舞しめらるゝに長壽楽ハ濵主が創成る所の舞楽也哥を一首帝へ奉る帝これに感じ給ひて御衣を賜ふといふ

翁とて侘やはをらん草も木も栄る時に出て舞てん

伶人助元

伶人助元ハ助種が父なり横笛を能ふくなれりし妬を得たり或時かしの罪ありて左近府の牢へ係るこの牢の中に大なる蛇ありて人を害れ助元是を聞て甚怖る景して夜半ぞかゝるに大蛇あらはれ其頭ハ獅子のごとく眼を根提れ如しその舌三尺斗にあまり口を開き助元を呑むとれ助元ふあんとするに術なく家にありし横笛を取出し還城楽を吹く大蛇ハ頭をたれ耳を傾て衛久しく笛の音を聞事あるが如し其て大蛇ハ退けり助元ハ終に罪ゆるされし事を得たりといふ

名畫精神

文徳實録に云百済の河成といふ者あり其
生質武勇に猛く能強弓を引くやすく圖畫
に妙を得たりある時宮中にある人を頼て河
成が從者を呼事ありしに志らざれば其人其從者
は面をいまだ見ねばいかにと問河成たとひまうり
從者の形體を圖しける後に果して其人を得
たりといへり又今昔物語に云百済の河成と
飛騨の工は相共に更衣し或時飛騨が宅中に
小き堂を建て河成を呼て見せける其堂四
面に戸を開く河成をめして南の方より昇ら
とすれバたちまち扉をはたと閉て去せんとすれハ開かれバ

さて西の方に至てまた扉の閉る事前の如し北
東の戸ハつぎつぎ開く東へまはればまたとぢ
とぢぬ斯のごとく終に入る事を得ずして帰
りぬ其後ほどを經て河成に飛騨を呼則
百済が宅へ来りて案内に童子出むかひて
請じ入る飛騨ハ何ごゝろなく廊下をとほるに
は死人ありて倒る其かたちぬくまりうるさて臭
き事いふ斗なく鼻を衝て飛騨をそむ事
能得ずして退て庭の下へくだりしに河成ハこれをみて笑て
出て迎入る其の死骸を近く見ればそれハいち
圖畫なりといふ傳に云巨勢金岡といふもの

有元ハ巨勢氏中納言野足が子なり清和天皇
より醍醐天皇まで五代の朝に仕官大納言
に至る曾て菅丞相と更隔し能画を書て
名を得たり始て紫宸殿の賢聖の像を畫き
小野道風その讃を書金岡ハ一條院の御時河
内國金田村に住れ或時繪馬を書て金田の
神社に納むされに毎夜出て近辺の稲を喰
後に其事をきゝて筆を用て是を書つなぐ
その後出ざるといふ著聞集に云御府に
納むる所の金岡が書る馬毎夜萩の戸に出て
萩の花を嚙因て畫工に勅して筆をとりて

是を繋しむ果して止むと云また仁和寺御室に
金岡が畫ける馬ありて毎夜出て近境の稲を
喰里人どもいかりて其両眼をくりぬく其後止
みしと云
三才圖會に云僧帯興が畫し龍ハ宋の明帝の
時累月旱して天地に祈れども験なし時に
帯興が畫を水の傍に置しかハ時に應じて澍雨
ふると云また類苑に云徐諤といふ人牛の畫を得き
その牛昼ハ草を喰夜ハ帰て欄中に臥れ
徐諤是を後主の煜といふ人へ送る煜これを
此繪をもて宋の太宗に奉る帝後苑に張く

群臣に問に、よく知る者なし。ここに僧録賛
寧通慧大師の云、日本の海水干る事ある時、灘の
石より顕れ、倭人蚌腊の中に餘涎投滴ある
ものを得て、色に染せ物に著る時は、昼は隠て
夜は何よりも光ると云

筭術妙

西京雑記に云、漢の安定年中、嵩眞と云人、筭
数を能し、自其の年七十三にして、綏和元年
正月二十五日の晡時に死すと云ふ事を筭て知
則其の事を家の内の壁に書けるに、二十四日
の晡時に死る。其妻、筭を見る時に、常に一筭を

下し是を告ぐ。ひとへに慮眺旨ある故に告れば、よく暴
して一日先だりも違はず。曹元理と云ふ者、東西
二国の米を筭ふるに、圭合も違へず。これに西の
国にてただ一事、一升則大なる鼠ありて米一
升を入るぞありけり。後に元理是を聞て云、鼠
の米を喰事と云ふことは面の皮を剥にあらば
也と云ふ。北史綦毋懐文が伝に云、晋陽館に
蠕蠕国の客といふ人あり。胡国の沙門懐文に語
て云、此の人異なる算術あると聞て、庭中の棗
の樹をさして云、筭術にて棗の実の数いくら
赤白何ほど、赤白交じるもの何ほどといふ事を

問て則剥て是を數ふる唯一遍へ了て龕者の云
かなしびしかなしし更に其本をもとむ
きハ果して實に落けりと云

伏見翁

住古伏見翁といふ者ありいづくの所の人といふ
事をしらず或人の云天竺大和國菅原寺の側り
臥て三年まで起ず言ハず人をハ是
を啞なりといふ時に首を上て東の方を見けれ
あるとき天平八年行基法師婆羅門僧正を
ひきゐて菅原寺に帰りて食膳を設けて二人
とともに樂て則箸を取て柏板として二人の僧
たびに翁ふなし時に門前の翁俄に起て寺に
入て翁に翁を作りて唄て云時なるかな
儀熟せるかなと二人相かたる翁あるなし手に
啞の態をなし事ハこの哥を唄むがためなり
時に頭をふりて東を見るハ東大寺の營搆
を見るなり翁の伏する所を是よりして臥見
の里と号くと云此事本朝列仙傳および和
漢三才圖會などに見えたり

角異

元亨釋書に云角異ハ天台の僧毎年七月
十五日法幢院に會しておのおの靈驗の勝劣

称識る事あり是を角異といふ俗の角觝に似たり天暦六年叡山の僧へと浄蔵と角異をなしけれバ浄蔵一の大石を咒して傳る其石をつらね上下へ宛轉する事毬をとるがごとし人是を奇とし僧へ念ぜよと叱ていふ此との甚だ鬧し何ぞ恬静ならざると云畢てかの石動ければ二僧持念盛んなり変ずるにおのづく石中より別まて両片となりをつらし躍て二僧めん前へ至るといへり

射柳

陳眉公秘笈に云胡人葫蘆の中へ鵓鴿を入て是を柳の樹の上に掛ていふて射る其矢葫蘆を射て中より鵓鴿出て飛ぶ事の高下をもつてて勝負を决すれバ毎年端午の日此たはむれをして賭と成是を射柳と云となり

王猛鬻畚

晋書に云王猛といふ人若かりし時畚を賣を業とす或時畚を買人あり價を貴く賣る然れども其人に價なしとて王猛をつれて其人の家に至れバ深山に至る人の老父胡床に踞て座をこれを見る曽て畚の價を十倍にまして人を附て王猛を送らしむといふ

大聲人

東鑑に云足利又太郎忠綱ハ前歯の長さ一寸に
志て其声十里に響くと云ふ或説に云田原
又太郎忠綱ハ又足利とも田原藤太八代の末孫後
綱が子にして下野國の人なり其身に三絶あり
力ハ百人に當り聲ハ十里に聞へ歯の長さ事
一寸なりと云又徒然草に云元良親皇は
元日奏賀の声大極殿より鳥羽の作道へ聞
ゆ其間凡十餘里とぞ

男夫産子

五雑俎に云宋の宣和六年に青菓を賣る男

有孕で女子を産とふ倚て大明の周文襄と云
人姑蘇といふ所に在し日男夫の子を産と告
れる者あり周文襄答へて云其諸門子を見て
云汝等こまと慎め近来男色のはなはだしき
事女色に勝まされり以至の勢なりと云

倚人

相傳へて云甲斐の武田信玄の家臣山縣三郎
兵衛は兎唇なり山本勘介といふ人ハ眇なり
また福島左衛門正則の家臣福島丹後ハ蹻
なり小関石見も眇なりまた長尾隼人も
兎唇なり是等ハ皆近代武名に鳴りし人

にあらず不具なり
穀梁傳に云季孫と行父は禿なり晋の郤克は眇なり衛の孫良父は蹙なり曹の公子手は僂なり右の五人同時に齊の國へ聘れ時に齊の國にあらず季孫と行父には共に禿たる人を出して是をむかへ郤克には眇たる者を出して迎公子手には僂を出して是をむかへしむ蕭の同叔子といふ人臺の上にあらず是を見て笑ふ客おの〳〵ら怒てびにして去れ齊人の云齊患これより始ると云

異相人

神武天皇の朝に高尾張の邑に土蜘蛛といふ人あ
りそのかたち身ハ短して手足ハ長く侏儒の如し
皇帝葛の網を結て襲て是を殺し給ふ因て
其邑を改て葛城といふとなりけると相傳へて云
神功皇后いまだ即位ましまさゞる時荷持田村に
羽白の熊鷲といふ者あり其の人強健にして身
に翼ありて能飛で高く翔る事をなして皇
命に随ハず常に人民の寶を盗む皇后怒りて
討亡したまふとぞまた十七代仁徳天皇の朝に飛騨国
に人あり名を宿儺といふ其かたち一體に両面
有て其の面相背く頂合て項なしおの〳〵四

に手足あり膝ハあれども膕踵はなし力強くし
て軽捷なり左右に剱を佩て四の手に弓矢を
携へて皇命に随ハず人民を掠むるによつて
和珥の臣の祖難波の根子武振熊といふ者を
はかりして是を誅したまふと云
三才圖會に云漢の平帝の元始元年に子を
産む者あり両の頭四の臂あり又いふ漢の靈
帝の中元元年また両頭の男子を生るまた
後漢の建安年中また両頭の女子を生るまたの
ある晋の懐帝の永嘉元年鳥の頭両足は
馬の蹄手ハ一ツにして毛なく尾ハ黄色にして

大さ椀のごとくなる子を生ことの有ゆゑ晋の元
帝の時大興三年謝平と云人の妻子を生で
地に墜ば濞たる声ありて暫にして死ぬ
鼻目ふれ頂の上にあり面の頂の如し口ハ
歯ありて連りて一の如し胸ハ鼈のごとく手足
の爪ハ鳥のごとくふちまがり皆下へかゞまると云

半男女

五雑俎に云晋の恵帝の時に京洛に人あり其の
からだ男女の體をかね能両ながら人道を用るとの
有今の人是を半男女と云近ごろ毘陵に一人
の播紳の婦人子の刻より午の刻に至りてハ男子と
なり未の刻より亥の刻に至りてハ女となる其夫妾
を置てあり其の中に枕席を侍るとの有て語
て云男子と異なる事なく但陽道かしく弱き
而已なりといふ或説に云上半月ハ男となり下
半月ハ女となるとも云
按ずるに大般若経に博叉半擇迦といふとの
是なりとも云

閹人

輟耕録に云沈生といふ者姦事を犯して露ま
自刀をもつて其勢を割く血出て日を経てとと
口合ぬ或人其割所の勢を尋て是を粉し

擣て湯にて服さしむ数日をへずして則愈ゆ
蚕室に下れる者この法をもちゆれば有益あらむ
また

按ずれば閹人ハ俗に云羅切の事なり是を
蠶室に下るといふ

男變して女となる　因果物語下ノ五ニ在往見

奇異雑談に云下野国足利の学侶某男
根たれて痒して頻に熱湯にて揚あれバ
後は縮まりて陰戸となり造酒家へ嫁して
二人の子を生むまた越後国の人某十八才に
して出家して丹波国大野原の會下に至

揚 音タウ

れ其後三年を経て京都へゆく摂州高槻城
見むと思ひ近江国蒲生郡枝村といふ所に宿り
宿れ折ふし霖雨ふりて三日逗留しけるに
或夜の夢うつゝともなく化たる女となると見れ
果して翌日その陽根縮まりて陰戸となり且
音声容儀おのづから女となり終に其家の
主と婚して子を生む其後十餘年ありて
師の僧来りて此宿に泊るかの婦人是を見
て右の始末を語りけれバ僧もあきれて奇怪と思ひ
しとぞ
按ずれば奇異雑談は天文十年中村豊之

前身の子息著述なり此の事四十年以前
にあるといふ時ハ明應年中の事なれバ盛
し

漢の哀帝の建平年中に男子化して女
子となり人に嫁して一子を生ミしと明の隆
慶二年李良と云民あり其身貧にして
妻を出してみづから人に傭はるものに二月九
日大きに腹痛して四月に至て陰嚢おのづから
縮りて腹に入変じて陰戸となる次の月経
みちしより行をはじめ女の様にかはる時に
年二十八歳なりと云

女變男

魏の襄王三年に女子あり首より化して丈
夫となり妻をむかへて子を生ぜしと云晋の
惠帝の元康年中に女子あり周世寧と名
付く歳八歳にして漸々に化して男となる
歳十七八歳に至て氣性なる女體化して尽さ
ず男體ならずとも徹せし妻を畜へて子を
なしといふ

瘖瘂

日本紀に云垂仁天皇の皇子誉津別王御
歳三十に満させたまひていまだ能言語をなし

是は十月八日大殿の前を鵠といふ鳥なけるを
鳴て空を渡る事ありき皇子是を見給ひてはじめ
始て日是何ものぞと問て天湯河板挙に勅
しためて是を捕しむ板挙遠く鵠の飛方を望
追尋て出雲国に至て捕獲て十月二日鵠を
献る天皇よろこびて皇子この鵠を弄びたまひ終
に言事を得たまふによつて板挙をば厚く賞し給ひ
姓を賜ひて鳥取造と云となり

白子

五雑組に云晋の恵帝永寧元年に小児あり
生八歳にして髪も體も悉く白し能卜を
なんとする闇にも白子あり其體みな白毛にして一とも
黒きものなし両の目ハ昏くて然として甚ものを見
ざるといふ

侏儒

日本紀に云天智天皇の十年ハ常陸国より歳十六
歳の子を貢れり其長さ尺六寸といふ備さに近きは延宝
年中にある人の侏儒あり名を市春といふ年十齢
三十斗頭面肥てふとく鬚眉髪音声ともに稍僬
なり唯手足の短き事三四歳の児の如し長二
尺にあまれり能文字を書八卦を考て吉凶を卜しける
といふ

五雑俎に云謝肇淛（五雑組の作者）閩にありし時ある人
を見る家三十斗首ハ常の人の如く頂より下ハ
総て殺月の嬰兒のごとく弱して立て行事なりけれ
髪を剃て僧となり竹篭の中に座して人是を
舁かく木魚を敲き経を讀事をなし是奇怪な
ることと云り

無手人

延寶八年中に摂津国大坂にて生ながらにして両の手
なき者あり足にて用を弁じ且文字を書弓を射て
芝居へ出て銭をとりしと云
酉陽雑俎に云大暦年中に東都の天津橋に一人
の乞兒あり両の手なくして右の足にて筆をはさみ
経を写して銭を乞其の文字を書むとし思ふ時ハまづ
筆を再三なげあげる事高さ尺余なるをうけとるに曽て
取落さず文字は官楷にして手にて書にも勝て
ありしと

失帰妖

公卿補任に云武内宿祢ハ孝元天皇五代の孫なり景
行天皇九年己卯に生れ仁徳天皇七十八年庚寅
に薨じて六帝に歴事して其寿三百十二歳
甚終る所をしらず或人の云美濃国不破の山に入
て見へずと云又云東征の時軍中に薨じ

大和國葛下郡に葬る其墓を室墓と名付と云
道守臣東人ハ其齢百二十二歳にして聰明なる事
わか壮の如し桓武帝是に衣服を賜ふと云
五雜俎に云漢の竇公ハ其年百八十歳晋の趙逸
ハ二百歳洛陽の李元爽ハ其歳百三十六歳なりしと
云また穰城に人あり二百四十歳常に米穀を食
せず唯曾孫の婦の乳を呑む范明友か鮮卑奴
ハ二百五十歳梁の鄱陽の忠烈王の友僧恵照ハ元和
年中に至りて猶存命せり其歳二百九十歳な
りしと云

按ずれバ五雜俎に云人の壽百歳にあまるハ殺

の絶なり故に百二十をこえて死ざるは是を失帰
れ妖と云とそ

人妖

五雜俎に云元明の花敬定は首を喪て後馬より
下りて手をもつて縄を洗ふ女ありて首のなきを見
て驚て其の事を云バ其言葉を聞てすなはち
倒るゝ又淳安の潘翁といふ者は首を斬まてな
がく崔廣宗ハ首なくして飲食情欲は旅に皆
事なき人の男子を設て後五年にして死せ
是等ハ人の妖に近しと云

長乳婦

五雑俎に云九眞の女子趙嫗が乳ハ其長さ數尺なり
またさき馮寶が妻洗氏が乳も長き事二三尺暑
熱の時節ハ其乳を肩に擔しと云

齋諧俗談巻之二 終

齋諧俗談巻之三

東都　大朏東華　著

怪産

相傳へて云三條院の御時永萬元年に頭二ツ手四ツの
三足の兒を産をしあると云
史記に云陸終氏が妻は左の脇より三人の子を生
右の脇より三人の子を生む此六人の子孫國を
傳ふと云ふ又魏志に云屈脩が妻ハ右の腋の下
小腹の上より男子を生すなはち其瘡いえて母子
ともに無事なりき又異苑に云與李宣が
妻ちやんで額の上に瘡あると見るに其瘡より

九州　大超和尚

天保十四春　大國関

児生る其子成人して軍将となると云ゆへ趙宣が母ハ娠で脾の上へ瘡是をうけハ瘡となる児其瘡より出生すとつへ廣博物志に云後魏の書宗の時煕平二年韓僧眞が娘ゑ母の右の脇より生る時珎の云ち明の隆慶五年二月に唐山縣の民の婦もじんて左の脇腫起まて脇より子を生とつ

孤児吸乳出

和漢三才圖會に云山家に孤の児あつて家婦是を育ふの婦いまぶ産をせざるに因て涙出れ晝ハ飴をもそうを夜ハおのきが乳を含しめて膝て臥を斷のごくする事数月にして乳けおのづゝ出て終に乳母となる人もあり是を疑詐れと云

痘瘡之起

或書に云推古天皇の三十四年日本國に來穀實孫びし故に三韓より來粟百七十艘を調貢次其船浪華にきたる其船の中に三人のもの人あつて疱瘡を病者一人は老人附添者人は婦人附きひ一人は僧附添て居る何國の人と云事をしらず次國民その名を問バ添居ものを答て云我くは疫神なり疱瘡という病を司る我等とて今この三人に附て此土に渡るいすれ今よりして此

國の人をやまこの病と思ひ我等は畠芋をぬひ吾を祠れよ畠芋を用ひなゆゑて所没んの家國民をしめて疱瘡を憂ふと云

大峯鬼

大和國吉野郡大峯に山人あるをれて鬼と稱し曾て往來の人れ嚢荷り李をなぞを價を取るゆ頁茶の其かまちたくゆし顔る鬼に似より是於大峯の鬼といふ傳へて云五鬼前鬼の末なりといふ

犬神人

京都建仁寺の門前に弦女曾ゆゑ云そのあて常に沓を作りて商ひ相傳へて云傳教大師入唐して歸朝の時人におしへて沓を造らしむまた弓の弦を作りて營を次其子孫相續して建仁寺町にあり毎年六月祇園會に恒例ゆゑ此人神輿の先に是を世に犬神人と云

豆藏

貞享元祿の頃攝津國に一人の乞士あり名を豆藏といふ市町に出て常に重き物をさげて錢を乞ひまた人の小兒を梯に乗らせて其身は揚ねとくさへ梯と揚ねの先へ立て起居ゆく事ふまきん小兒とやまと馴て怖まて或ハ長き

鎗と梟の先へ倒まに立て行ときハ蔓の先無一筋
を鼻の尖へ立て其まゝたはむれ唯練磨のことと云
或は又人あり腹の上に大なる臼を置保て杵
をもつてしめあるひは斧を腹の上に置て人二人
是に登りて躍るなどいふ諸身といふ類なりと云

粛慎隈

日本紀に云欽明天皇の五年十二月に佐渡国嶋の
北御名部の碕といふ所へ粛慎人来りて礼に宿留
て春夏の間捕魚をもつて食とし嶋の人これ人にあら
ずと云又鬼魅なりといひて敢て近付ずさまに嶋の東
に禹武といふ邑あり此の所の人椎の實を拾ひ熟

焼て喰ハむために是を灰の中に埋て皮を炮れ
ばたちまち化二人の人と化して火の上を飛び上る事
一尺余にして時とうはして相闘ぬ邑の人深く怪
み椎の実を取捨なば猶さ飛て相闘ふ事止
ず人おもて占て云是邑の人かならず鬼魅のた
めに迷ふされんといひしかバ程ずして其言葉の
ごとく掠られ宮におほく粛慎の人は瀬川の
浦といふ所へ移住すこの浦の神をいむしく人を見ず
敢て近づかず因て水に渇てその水を飲バ死
するもの半ばなり骨巌岫のごとく積たり
是を俗に粛慎の隈と呼ぶといふ

飛頭蠻

三才圖會に云大闍婆國の中に頭を飛すものあり
その人目に瞳なし其頭よく飛ゆゑその俗かれる
所を名付て蟲落といへり因て落民と号く漢
武帝の時因墀國といふ人南方に使ゆく其頭
に解形の民あまり頭を南海に飛し左の手
を東海に飛し右の手ハ西澤に飛せ暮に至
ては其首もどりて肩の上に帰るとし両の手
疾風にあへバ海の外に飄ろかすと云また南方異
物志に云嶺南の溪洞の中に飛頭蠻あり項
に赤き痕あるを夜にいたりて耳を翼として飛び

去りて虫を喰ひ明方ちかく帰てもとの如しと云また
捜神記に云呉将軍朱桓といふ人の婢は頭夜
にいたりて飛ぶと太平廣記に云飛頭獠ハ善
郡の東龍城の西南の地にして廣さ千里その
地これ塩田なり其嶺南の溪洞の中に折く
飛頭の者あり頭の飛んと一日まへに首筋に痕
ありて紅筋のごとし妻子見て是を守る其
人夜に入きハ状病氣の如くにしてたちまち此頭
身を放れて去岸根に行て蟹蚯蚓の類ハ
食ひ明方に至てかへり帰て夢のさめたるがごとく
其腹中實となると云

大食國

三才圖會に云大食國ハ海の西南一千里にあり山谷の間に居れ其國に樹あり枝の上に花を生ず形人の首の如し語音を解ず人問ふて借問すれバ唯笑ふのミにして頻に笑へバそれひらゑバて落ると云

長臂國

三才圖會に云長臂國ハ焦僥國の東にあり其人手を垂れバ地にとゞく住古人ありて海中にて一の布の袖を得たりその袖の長さ丈余ありといふ

長脚國

三才圖會に云長脚國は赤水の東にあり其國長臂國と近し其人ハ常に長臂國の人を負て海に入て魚を捕る長臂人は中人のごとくにして臂の長さ二丈といふ時ハ其の長脚も又三丈斗なるべしと云

小人國

三才圖會に云東方に小人國といふあり名付て竫といふ其人の長さ九寸とし道路にて鶴に逢へバ呑るゝゆへ出る時は群行すと云ふ又廣博物志に云魏の時に河間の王子亂ゝ家にて

雨の中に小児ありて八九人庭へ落其の丈六七寸ばかり自ら家ハ河東の南にありと風に吹れて塞外に至るといふ

崑崙奴

阿蘭陀船の中に乗来る人あり其の形真黒く志をぬれて軽く能檣の上を走る俗号て黒坊といふ久呂牟とは崑崙の唐音なり坊とハ髪のなき人の通稱なりゆゑ飛彈國美濃國の山中にも黒坊といふものあり其かしら猿のごとくにしておほきく色ハ黒く毛長し能立て行また能人の言葉をなして人の意を察次

あらましと害をなさんバ山人是を黒坊と名付たりひよ
怖れ恐れをしへわるとて是を殺さんとすれば黒坊よ
づ其意をさとて疾みげ去るゆへに捕事かなハず
と云

酒魔

韻府に云く載とふ人生質酒をこのむ鼻に酒の
氣を嗅バ即に酔ふ或人針にて其鼻の尖を挑切
ハ小き虫出たり是を酒魔と云て其日より酒一斗を
飲とぞ

病忘人

五雑俎に云く齊の國に忘るゝを病る者あり行時ハ止る

事を忘れ所にてハ起る事を忘る其ハ妻是を患て
いふ艾子と云人ハよく善忘の病を愈すと往て是
を師としまへと云夫もふと馬にのりて弓矢を持て行
いまだ一舎も行ざるに内逼ありて馬より下りて大便
するとて矢を土に植て馬を木に繋て便し終て
其矢を見ても打忘れて危くも流矢何方より
来るやと右を顧て其馬を見て喜ていふ流矢の
危きにあらずといへども馬を得たりとて轡をとり家
帰らんとして吾せし糞を見て足を側て大に嗔て
踏て足を汚しで口惜くもなく馬に鞭てゆくとて
来し道に帰る吾門の前に徘徊して吾家を忘れ

艾子ハ寓し思案する時其妻是を見て又忘れたる
事を念て是を罵る其人恨然たる貞なく嬢子え
より相識ず何の故なる言葉を出して人を傷るやと
云れたり

鸜鵒瘴

陳眉公枕談に云広南に鸜鵒多く常に飛び交
数千なして群をなす俗是を養ふ俗手なく鸜
鵒の背を頬に觸る事を忌とし是を犯すときの
あれば頭を痛て死す俗是をあふ瘴と號
くと云

二
貝母治悪瘡

相傳て云往昔ある人の商人ありて左の膊の上に瘡あり
生じ其形人の面の如し酒を餘の苦わし戯に酒を
其口中へ滴すに面色赤くなる物を喰せしむれば能
喰ふ多く喰ふ時は膊の肉脹起る事と食ハざれば
臂まへする然るに或人の名醫ありて諸薬金石
草木まで類をもて試るに悉く苦む事なし唯其の
中に貝母に至て其瘡眉をしかめ目を閉ければ
おしさ葦の筒にて瘡の口を敗りて是をそゝげハ数日
にして痂をなして癒ると云ふまでもと何の病と
いふ事をまへ次と云

劉寄奴草

南史に云宋の高祖劉裕まだいやしき時荻を討きりけるに
新州にて一ツの大蛇を見る則是を射る翌日其所に
往て見れバ杵臼の音ありて尋見れバ童子数人
ありて皆青衣を着て榛の林の中にて薬を搗其
故を問へバ答て云我が主人さきの日劉寄奴がために射
らるゝ因て薬を合て是に傳くと裕が云やう神ならバ
是を殺されざるぞ童子の云寄奴ハ王となり殺しがたしと
時に裕きつく是を叱しかバ童子ミな散じて失ぬれバ
其の薬を収て帰りて常に金瘡に逢バ是
を傳るに癒ずといふ事なし因て其草を称
して劉寄奴草と云とぞ

藍澱治噎疾

唐の永徽年中にある人の僧ありて噎を病て食を下
さず此事数年既に及で死に臨で云吾死て後胸喉
を開て何の物かありて吾を苦しむる事斯のごとく
なるといふ事を見るべしと云て死す因て其言
葉のごとくにするに胸中を開しに一物を得たり
其の形魚に似て両の頭ありて遍躰ハ悉く肉鱗
に似たり是を鉢の中に置バ能躍て止ず戯に諸
味を投ずるに食事を見ざるといふ事なし皆化て
水となるやゝ諸の毒物を投じても皆消化す
去ほどにある人の僧ありぬし藍の澱を作る因て

ゝの蔵腹とかし斗擻ありしハ則怖まて奔走て
暫の内に化して水となると云

無名異之切

和漢三才圖會に云往古人ありて山鷄の網に掛て
て足を損し脱去りて則その石を啣てその
損しる所を數遍摩挲すれバ遂に愈て飛去るを
見る因て其石を取て人々傷折に傳るまた紀に勉
なりと云

應聲虫

遯齋閑覧に云往古人ありて其人言語を發する度ふ
腹中ふ小き聲ありて是に應ぞ漸くに其声大

なり彼ぞ道士ありて云是應声虫なり但し
本草を讀べし其云ざるものを取て是を治せよと
教しの因て本草を讀に雷丸に至て声應ず終に
雷丸を數粒服しかバ忽ち愈たりと云

青夫錢

相傳て云青夫と云虫を殺し母の血を錢に塗子の
血を錢に塗て市に出て物を買バ母錢子のづ
から歸る是を子母錢と云とぞ

金中虫

和漢三才圖會に云往古冶工ありて一ッの釜を破て
て其中をする所を見まバ白き中に一ッの虫あり

形ハ蚕虫の如くにして色赤し是をもちて金の中
おくときハ虫わくの諺なりと云

蝦夷の砂金

蝦夷が嶋の波保呂より砂金を出せは此水中に
あり是世にいふ所の鼓金なり日本の人多く行
ものあり冬の間に至るとそのまゝと帰帆の時に及び
寒風をおかして到りしく帰来る者百人にして一人もなし
なりと云

韃靼船奇異

相傳て云韃靼國ハ中國へ通路もなき中國の経
書の類皆重んじ價を出して是を求め徳ある経書
の中にも孟子の書なりなしと云とし孟子の書
を積て行ものあれバ其船たちまち風波にて溺るゝと
いふ是をもつて希代の奇事なり

仙遊山

交趾國に仙遊山といふ山あり一名ハ爛柯山ともいふ
交趾ハ今いふ安南國なり日本より凡千四百里 述異記に云晋の時に一人の樵夫あり
名を王質といふ或時此の山に入て樵せしに二人の
仙人相對して圍碁をうちけるを見るに彼の仙人
王質に一物を與ふそのかたち棗の核の如し則是
を喰へバ飢を困て持る斧を側に置て圍碁を
見るに終に斧の柯爛たり王質驚て古郷へ帰て見るにバ

まさる時なる人なしと云

鶍鼓樓

事物紀原に云唐の玄宗皇帝の時春なれども寒くて
梅の花咲ざる事あり玄宗自楼に登て鶍鼓
を打ち給へば百花一時に皆開く於て其楼
を鶍鼓樓と號すと云

聚寶碗

五雜俎に云巴東寺の僧青磁の碗を得たり其中へ
米を投ずれば一夕にして盆に満てり金銀
を投ずれば皆然り是を聚寶盆と号す太明の
沈萬三と云人天下に名ある富饒の人なり其家に
聚寶碗ありしといふ

火浣布

神異経に云荒外に大山あり其中に不盡の木を生
ず昼夜燃て暴風あれども猛からず猛雨あれども消ず其
中に鼠あつて重さ千斤毛の長さ二尺余あり細きこと絲
の如し但し火の中に居ては直赤く時々外へ出ては
毛ろ白し水を灌げば死す其毛を取て
織て布となし用ゆ其布をよごれあれば火の中
へ入るれば垢則落ると云
按ずるに本草綱目に云火鼠は西域および南海火
州より出其山に野火ありて春生じ秋みのる

死ハ其中より鼠走りいでゝ甚だ多く其毛
ならびに草木の皮を取て布に織合して
汚れたる時は火にくべて焼バ潔し是を火浣布
と号くと云

七難揃毛

下総國豊田郡石下村に東弘寺と云一向宗の寺あり
此寺に什物多し其中に七難の揃毛と云ものゝ
あり其色五采にして長さ四丈余ありと見ゆ何
ものゝ毛といふ事をしらず相傳て云近江國竹生嶋
信濃國戸隠山などにもありといふ往昔ある人の
異婦ありて其名を七難といふ其人の陰毛なりと云

按ずれバ塵塚物語など竹生嶋七難の揃毛の事
を載すれど近世印行の龍宮船などと見えたり

倉橋山鏡

相傳て云貞観十七年七月八日倉橋山の岸崩て一ツ
の鏡出たり其廣さ三尺七寸是を取て禁理へ奉
ると云倉橋山ハ大和國高市郡と十市郡の境に
あり

川越名號

越後國高田の寺町に本誓寺と云寺あり此寺に川
越の名號といふあり相傳て云親鸞聖人當國へ
屋野より國府へ行る時柿崎村と云所にて扇

子を賣家へ云寄りて一宿なさしめるに亭主夫
婦宿を借し聖人を持ち其家の軒端に宿て
稱名念佛して亭主たちは輪廻いたして悔の情なく
發して話ひ入りし留め時に聖人戯に哥を讀て
すひく且九字の名號を書てかへしたるに
柿脩によめく宿を取りし主の人難しかりけり
亭主返哥を讀
かも通る法師に宿を借りるにかの名字の九字の名号
翌朝聖人出てたちひて二町斗行ける米山寺
川といふ川を越るに扇子屋の妻女走りて
来て哥かとし筆跡をと乞われと稱し聖人の云海

此の川を渡る事なるべしと其の所なく紙を開待べ
しとて云て則ち筒の中より硯筆を出し給ひて六字
の名号を書てあひしに文字川を隔て題號なり
是を川越の名号と云寺に同國浄興寺にも川越
の名號あり皆つゐに同じ事なりと云

法隆寺瓢

大和國法隆寺に一つの瓢あり甚だ大きなり其
形さくて賢聖の像を彫て面容玄冠なる
なる巧なり相傳て云讃岐國に自
生する所なり敏達天皇の春是を献じ聖徳太
子降誕の瑞なりとて法隆寺の什物と成

とふ

怪鏡

五雜俎に云周の世の火齊鏡ハ闇に中に物を視る事晝の
如く鏡に向て語すれバ鏡中の影も聲に應て言と云
また述異記に云日南國に石の鏡あり方百里あかりて五
臟六府を觀る事ごとく仙人鏡と号く國中の人疾ある
時ハ其形を照して癒ざるなしと云々また神異經
に云借古夫婦わかれを別れんとする時鏡を破て半をのく
其半分を持て是を信とし獨るに其婦他人と契る
事あり其鏡たちまち一ツの鵲と化して夫の前に
至る因て其夫是を知ると云

後世鏡を鋳に鵲を作て背の上に
置事是よりはじまると云

右馬頭市

讃岐國高松石清水に八幡宮の社あり（高松の惣氏神）傳へて云 細川右馬頭と同左馬頭と當國にて相戦ありし時 右馬頭の軍散々に破て此所へ遁落あるに 小き祠ありしを見て 里人に神の名を問バ 八幡宮なりと言まゝ すなハち馬より下て祈願を寄て 翌日の對陣に虚空より袋のごとくなるものゝ降來をたちまち其中より馬蜂数万疋ひらひらと飛で 左馬頭が軍兵を悉く螫たりしによつて 右馬頭進て是を討たれバ勝利を得たまふ 其後右馬頭八幡宮へ賽禮奉幣厳重なりに行ひとゝ云 今に至るまでその所に毎歳四月三日市立 是を右馬頭市と云

海人燒琴

日本紀に云 應神天皇の五年に伊豆國に命して船を造しむ その船の長さ十丈にして 疾ゆく事駛がごとし 故に其船を輕野と名附く 同三十一年にかの船朽て用るに足らざれバ 故にその朽木を薪として塩を焼くことあり その薪の中に燃ざる木あり すなハち其燃ざる木を帝へたてまつる 帝怪しとおもひ 其のち新羅國よりきたる人の異匠なるものに命じて是を琴につくらさ

しひきるまでの音声さやかにして遠く聞ゆ
故に是を号て天の鼓さして呼たまひしとぞ
云

尾花馬市

出羽國尾花澤といふ所に毎年六月中旬のころ
陸奥出羽の馬を牽出して馬市あることあれば其
馬と買との直段を究るに馬主是を負ざるぞの
馬主が頭を敲く其敲く事一ツにては鳥目百疋を
出し二ツにて八二百疋をし踏たおせは金を分を出
して價を増と云一興なり希有の事ゆへに記ス

辟寒金

三才圖會に云昆明國に嗽金鳥といふ鳥ありその
飛形のたぐ黄色にして常に海上を翔る魏の明
帝の時に是を献ぜるとのあるを飼みに真珠と亀
の脳とを喰しむ常に金の屑の粟のごくなるを吐く
宮人あらそひて鳥の吐ところの金を取て釵珥に
作る是を辟寒金と云鳥の性寒気を懼るゆへ故
なりとぞ云

百合若丸之弓

備前國赤坂郡何折石上の社に百合稚丸の鉄
弓あると云人是を見し事あるに只いふ寛文年
中當國の直臣射場藤右衛門といふ人世に聞し

強弓なりとの人々にかの弓を引て難とせば終に此弓を引折て納ひと云々

鳴門太鼓

阿波國鳴門ハ海上一の難所なり相傳て云後光厳院の御宇康安元年の夏秋の間大地震ありて七月廿四日に俄に潮かれて陸となるそのとき鳴門の岩の上に周二十尋許の太鼓見へたり胴ハ石にして面ハ水牛の皮巴の紋を畫き銀の泡頭ありけり是を見る人大きに怪しおそれて曾て誠に是をおほいなる撞木を用て鐘を撞がごとくれば其の音天に響き山崩潮湧出て人民逃去てかの太鼓の行方をしらずと云傳へ或書に云いつの比よりか有けん鳴門たえず鳴て近國迄の響音雷のごとし因て都にて諸御評議ありてしかれば小野小町に勅諚ありて小町淡路に下向して鳴門に行て一首の和哥を詠じ

よの中に穂ずれのまゝと種を蒔置て粟のなるとハ誰か云らん

と讀ければたちまち鳴動やみけるとなん淡路國の行者が嶽の下なる所の海端に小町岩と云て岩のうへに一平なる岩海上へ望てありこの岩の上にて小町哥を詠じて水神をまつりし所と云へり

日本駿河三保ノ
松原ノ天女ノ例リ

鳥化成美女

捜神記に云豫章の新喩縣に鳥あり化して美
女となりてあそぶ其時まさに脱おく所の毛衣を人に
取る實にあわく此事を得ず故にかの人を伴ひ
家に帰りて夫婦となりて終に三人の女子を生む其
後むすめにおのれが毛衣を得て飛さると云

童謡

日本紀に云崇神天皇の十年大彦命を始めて
將軍と定むるが山背の平坂と云所へ至らまふん
たまふ時道の傍に一人の童女ありて歌て云
彌磨紀異利寐胡播揶飯廼餓鳥塢志齋

勞苦農殊末句志羅珥比賣那素寐殊望
御間城入彦八宗神天皇の御諱なり　大彦命是を怪しみて彼の童女
に問て云是何の歌ぞ答て云ふ事なうき是
唯の哥なりとつゐに又唄ゐてたちまち見へず
是ハわつら武埴安彦が謀反の前表なりと云

鶯囀和哥

相傳て云孝謙天皇の御時大和國葛上郡高天寺
の僧ある人の童見ありまたけるに其兒俄に死すかの僧
悲歎なおかりし既に年月を隔て哀情うすく
なりて是をともる時に庭前の梅の樹へ鶯来
りて鳴かの僧ききを怪て是を聞に初陽毎

朝来不遑還来棲と唱るが如し則倭字にて是をいはせば
袖香のゆしさあかればまんじと逢でみて帰るのでの棲に
ゆく三十一字の和哥とする間てかの僧これ見作して
鶯となりけるを悟て哀痛いよく止次と云

白狐尾

著聞集に云知足院殿志願の事ありていまだ屡
まど間て大権坊に命じて是を祈らしめられり
二七日に當て知足院殿昼寝をしたまふ時に何國
ともなくきて人の美女来りて枕にきり其髪の
長さ事居をとりて三尺ばかり宛然として天女の如し則其の髪を捕て是を引たまふに彼女かきけんと
して終に其髪切られて夢見たまひ覚て見れ
ば狐の尾なりしかば即ち此事を行者に語
りたまへば行者の云明日の午の刻に志願成るべしと
果して喜信ありしとぞ

古塚怪異

程氏遺書に云彼斯國にて古き塚をあばく事
ありきたるに棺の内にあれ盡て唯心ばかり残る其
堅き事石のごとし鋸にてこれを開て是を見るに
山水の形ありて青碧にして畫が如し傍に亭
人の婦ありて形を移して欄干に倚かかりたる

姿なりとこの女常に山とこのひの癖ありて朝夕
あるを留むゆくに融結して斷のごとしとぞきさ
僧の法循ハ般舟三昧の法を行ひしより入寂を示さ
く後火葬せしに心化せずして五色の光を出
し中に佛像ありて高さ三寸斗骨にあらずして石な
非ず百體ともに具足せりと云

齋諧俗談巻之三　終

齋諧俗談巻之四

東都　大朏東華　著

縣守淵

日本紀に云仁徳天皇の六十七年に備中國川嶋河
に大虬ありて其所に行ものかならず毒にあたりて多
く死せり爰に縣守あり其人猛くして強力なり三の
瓠を水に投して云吾汝を殺んと思ども此瓠をしづ
めよ沈めば是を止むと沈むる事ならずんば汝を
伐らん時にかの虬それから鹿に化して其瓠を沈
めんとすれども沈む事あたはず爰において剱を拔
水に入て虬を斬てやしくかの虬の屬を尋ぬるに淵

底の曲穴に満くたるを是を悉く斬る時に河水たちまち血に變じゆへに其水を號て縣守の淵と云

鬼彈

南中志に云永昌郡に禁水と云川あり十二月八渡殺害し餘の月ハ人を殺じ其氣あしきことの有声をなして其形を見ざれバ人に當れば則青く爛る是を名付て鬼彈と云

加牟末牟淵

下野國日光山にある淵あり其ひとつに巖石峙て淵の上へ覆ふ相傳て云弘法大師此所に至てあひて淵を隔て[梵字]の文字を書つけたまひけり其文字岩頭に現在せりと云

三途川死出山

越中國立山の麓に岩倉川と云川あり上に大橋あり長さ凡百三十丈その橋柱を用ひずして藤蔓をみなもて桁とし其上に板をしきて他國の人たやすく渡ることを得ず土俗その川を呼て三途の大川と云すこし川の東に山あり是を死出の山と云其嶺に常に火氣ありて是を地獄といふ

僞橋

駿河國白子の町に僞の橋といふあり相傳ていふ往昔當國に流されし人あり（時代と姓名を忘れ）其人老母を

伴ひて紡績して身命を保其人ことを見るまゝ
或のひ自遠く出て資を求むる事月を経て
帰らず終に其の老母病て死す其子後に経て
家に帰り涕泣して臍を嚼といへども詮なし
因て貯し銭を木匠にあたへ橋を作りて老母
の追善とすれ此の橋の柱ある衣虫喰て
おのづから一首の和哥となる

生てかけて頼ぬ露の身を死ての後は偽の橋

是よりかの橋を偽の橋と号くと云

鵜瀬淵

若狭国遠敷郡の山の麓に鵜瀬淵と云ある相

傳て云鵜の鳥此の淵へ入れば必死すといへども
何の故と云事を知らず南都東大寺の二月
堂に石の井あり其底を抜て浅しる常に八一
滴の水なし然るに毎年の二月寺僧此の井に
ひとひ加持修行すれば若狭くと呼へば鵜の瀬淵
の水滴集して湧ごとくに出る其水を用て
墨をすり香を押れ是お夜孫く人の知る所なり

霊瓮之圖

南無頂上佛面除疫病
二月堂
南無最上佛面願滿足

此霊瓮の影を水に照して其水を呑ば疫病

瘡おゝひ思ふ人たちまちに平愈す東大寺の實忠
和尚瑞夢を蒙つて是をおこなふと云

夢野

摂津國湊川の近所に夢野といふ所あり 本名ハ岡鷲野と云
相傳て云往古大伴黒主此所に寓して或ある
夜に二の鹿ありて問答するを聞く牡鹿の云われ
夢に背の上へ霜の降と見るいかゞ牝鹿の云是悪き
夢なりおそらくは人のために殺さるべき兆なりと
云ふ黒主怪みて是をうかゞふに果して猟人来て
牡鹿を捕肉を割塩をもて和す是よりして此所を
夢野と呼と云

禁野

河内國交野郡に禁野と云所あり天子の御遊猟
の地にして尋常の殺生を停ひかるゆへに禁野
と名付く往古惟高の皇子この所に狩をしたま
ひて金色の三足雉を得させ玉ひしよりこの方
禁野となれり今ぞ里の名となる

八尾木

河内國若江郡に八尾木といふ所あり相傳て云
往古此所の谷小路に鶯ありて毎朝来りて
囀れ声亮くとして人の情を感ぜしむ其
鶯の尾に羽八枚ありて異品の鳥なり因てその

宿れる樹を八尾木とよび村の名とも八尾村と
いふとぞ

酒滴池

摂津国三田の里に酒滴大明神といふ社あり其
社の前に小さき池あるを志らずこの池なる酒の香
ありて池の邊へ立寄るに酒甕のにほひの如し
と云

耳梨池

大和国耳梨山の麓に耳梨の池といふあり相傳て云
往古き人の婦ありき名を鬘児といふ志かるに三人の男
ありてかの女をきそひて嘆て云一女の身の滅せむとき

草露の如し三人の男は志ざしをとげざる事石のごとしと云
て終に耳梨池の上に行て水底に身を投死せし時に
かの三人の男おのおの哀情にたへず哥を讃じと云
耳梨の池し恨めしわぎもこが来てかづかば水は涸れなん
足引の山かづらの子けふ行と我に告せばかへりこましを
足引の山かづらの子けふの事いづれの隈を見けり来まさん

織竿

織の竿といふは此國にてなる事なり初雪の降る
時に大なる竿をたてて年中降積る所の深浅を斗
きるなり深雪の國は越後出羽を第一とし次は信濃
是に次越後の高田出羽の尾花澤なども方四五里

斗と盛し次カ論山嶽のかさなりに因て淺深の違あるとしれて
三丈をバ常とし多くふりしき年ハ六七丈に至る事
ありさしもの深谷も平地となる因て常に屋の上を
掃捨ざれバ其家潰るゝなり常に穴を潜て其隣へ
通ぬ翌年の春に至るまで雪の中に蟄れすまひを
家のうちあかりふきさらし酷しく迎へとすと

處女塚

摂津國蘆屋の里味沼村に處女塚といふあり相傳て
云往古蘆屋の里にさる人の女あり其名を菟名日處
女といふさる男二人ありてともに是をこふさる人
一人ハ當國の住人名を佐さ男と云さる人ハ和泉國の住
人智努と云彼の兩人ともに志ことに更に勝劣なし
爰にかの女の父れ云汝等二人ともに生田川の水
鳥を射てよく中る者を婚とせんと云則二人の男
ありしひて是を射るにさる人ハ鳥の頭を射さる人ハ
鳥の尾を射るかの女兩人の射藝其勝劣なき事
を感して
住詫ぬ吾身なげてん津の國の生田の川ハ名のミ成り
少しく哥を誦じて終に身を投て死次に二人の男ともに
ともに水底へ飛入ておのおの其手足を捕て死す其
後三人の屍を取出して是を埋む三上の塚ハ女塚
の側東西にあるとと云

濡衣女墓

筑前国博多の東に濡衣女の墓と云あり相傳へて云
聖武天皇の御時佐野近世といへる者ありて筑前守に任じ
て當国にくだりけるに其妻継子をにくむ事甚し
或朝ある人の海人来りて太守に喚て云爰の娘吾が漁
衣を盗めるをえやく返してもかへさずと云近世もとより
性急の生質なるゆへ大に怒てたちまちかの娘を殺
せりし是継母の猶て海人と謀て斯ハからひけるに其
翌年かの娘父の枕の辺にあらはれて二首の和哥を
詠ぜりと
脱着る其のたびかさの濡衣ハ永き浮名のためしなりけり

濡衣の袖より傳ふ泪も終に名をのこし次ためしなり竜
近世夢さえてたちまちに怒泣て其妻を追去て其身
は出家して松浦山に住ひ世に松浦上人と稱せられしは
是なりかの娘の墓は今も聖福寺の西の門の側に
有又今も箱崎松原の西博多の東石堂村の小池
の中にあるといふ

雁卒都婆

河内國讃良郡中野村に雁卒都婆とて古き相
傳へて云往昔ある人の猟師あり或時鳴鳩の雁を射
て一の雁を得るにされば其雁に頭なし不思儀に
思てさるやして翌年の同日其の所にて一の雁
を射て是を見るに一の雁の頭を抱て地に落てき
すなはち去年うしなひし所の雁の首なり爰にかれ
かく猟師悲愛の情を發し其所に卒都婆を
建て業を捨て出家を遂るといふ

黄耳塚

述異記に云西晋の陸機といふ人呉國にありし後に洛に
仕ふ曾て能犬を飼其名を黄耳と云ある時戯れ
犬に向て吾家久しく音信なし汝よく馳て往むや
いなやと時に犬尾を振して声を發し是を勧む
即ち書を認竹の筒へ納て犬の
首に繋る犬そこを出て呉國へ趣く其道すがら

餓る時ハ道路の草を喰ひ水を渡る時ハ渡守に添
て私よ家よ終に陸機が家に至てねまれバ其
書を披見し返翰をかき筒に納しかバ馳出て
洛に帰れ其後かの犬死たり則葬て塚を築き
黄耳塚と呼ぬとぞ云

嗣信石碑

讃岐国屋嶋の壇の浦に佐藤嗣信の石碑あり
相傳て云後小松院の御宇至徳元年四月廿日陸奥
国の空信といふ沙門此の所にきて墓に詣ず
追悼の和哥を詠ず
痛しや君の命を次信るしるしの石ハ苔むすまでそ

を讀て手向あれバ石碑の中に声ありて
惜ともよも今まで永がらし身を捨て徃名をバ次信
と返哥を詠ぜしとぞ

宇治石塔

山城国宇治川の中に石塔あり其塔十三重にして
高さ五丈斗相傳て云後宇多院の御宇弘安九年
宇治川に寺の魚を捕て業とするものあり或時
西大寺の叡尊後に興正菩薩と云来りて多ひて是を見
なげひ組に教諭して殺生を停、かるまに布を晒
事をなし今まゐ木津川の布を晒人多しその
子孫なり因て叡尊石の塔を一基川中へ建て

供養をなしたまふその石塔洪水をふせぐと隠れ
なくて世人浮塔とよぶ

石成宗

續日本紀に云寶亀元年四十九代光仁帝西大寺の東の塔の礎を
破却す其石の大さ一丈余厚さ九尺なり此石ハもと
飯盛山の石なりしを数千人にて是を引日々
に去る事数歩にしてこの石おのづから鳴る響に
れぬく人夫を増して九日にして至る其後まもなく
いたり削刻て築基するに終る時に巫覡の輩
ともをバ石の祟と謂て悩む因て柴を積て是
と燒くだき酒三十餘斛をそゝぎてすつるに片く
に破却す因て道路に捨てあり其後天皇御脳あるを
光仁天皇　博士に命じて占しむるに破石の祟なりと奏
聞す因てやがて清浄の地に集置て人馬に踏しめず
といふ寺内の東南の隅にある破石是なり

石油

日本紀に云天智天皇の七年に越後国より燃る土
と燃る水とを献ると云
按ずるに是石油の事なり越後国村上の近所の
山の麓黒川村といふ所より出る其出る所泉の
水と雑て出土人其上に屋根を覆ひ草にて付て
釜の中へ入る多く取て燈に燃せば甚明なり

またうきこともその臭き事硫黄の氣の如し故に俗に臭水油と云。同國寺泊村柿崎村にてもこれ出る。近江國栗本郡石部村武佐村にて山野を堀て燃る土を取る。其形黒色にして少し赤きをまじへ。土人是を取て薪に用ゆ。しかれども甚だ臭し。相傳へて云。往昔神代に栗の大木有りし枯倒れて地に埋て數十里に亘る。因て其所を栗本郡と云ふよし。故に燃る土出ると云

石麪

唐の玄宗の天寶三年に醴泉湧出て石化して麪となる。又憲宗の元和四年にも石化して麪となる。宋の眞宗の祥府五年にも石脂を生じて麪の如し。仁宗の嘉祐七年にも麪を生ず。次哲宗の元豊三年にも石化して麪となる。いづれも皆貧民是を取て喰と云

巓頭岩

肥前國里見山に大智院とて眞言宗の寺あり。此境内に大なる盤あり。其大さ五丈餘。巓頭岩と号く。相傳て云。往古大蛇ありて此岩をまとひし事七匝。その蛇の常に棲所の池今にあり。鎭西八郎爲朝てきを射殺してより人民安堵せしと云

子持石

出羽國中嶋村に子持石といふあり文禄年中或人ひとつの小石を拾ひ帰て秘藏する事八拾餘年に至れるに其石次第に圓く一抱斗の大石となり小石を生事數十にしてあたかも子孫曾孫の如しと云

屏風石

越前國白山の麓牛首村と云所に屏風石と云あり其かたち横の大さ三十丈斗にして希有の大石なりまた紀伊國音無川にも斯の如きの石あり其折疊事自然と屏風の如くにして功成をより勝れり

燃石

三才圖會に云豫章に石あり其色黄白にして理あらし此石に水を灌ハたちまち暑くなれ其上へ鼎をかけて物を煮るに能熟す冷る時ハ亦水を灌と云雷煥といふ人この石を張華に問張華の云是燃石なりと云

照石

拾遺記に云方丈山の西に照石あり石を去る事十里にして人物の影を視るに皆よく鏡の如し石を碎て片くとなるに皆よく人を照す昭王この石を舂て泥となして通霞の臺を泥ると云

平盤

越前國白山の麓堂の森といふ所に平盤あり方三十丈斗人常に其石の面を往来すること希有の大石なり

魚龍石

廣博物志に云岐府の西龍列より七十餘里に魚龍洞ありて其の中に石あり或ハ大くあるひハ小し水に随てながれ出る是を破て見れバ石の中に魚龍の形ありて人其洞の前を通る時ハ敢て言語せずあやまりて言をのぶれバたちまち風雷の声を聞ことによつて驚懼す但し諸人其声を聞ずと云

天涯石地角石

三才圖會に云成都といふ所に天涯石地角石と云二の石あり天涯石ハ中興寺といふ寺にあり古老傳て云其石の上へ座をまたバ腓腫ていく事あるハ之に因て今に至るまで人敢て踏ず地角石ハ羅城門の西北の隅にありて高さ三尺餘也之ハ廟ありて王均が乱に門を守る者のために崩されて今ハなしといふ

洞其石

陳眉公秘笈に云新安の西王喬が洞其石ハ皆土

のなれ所にして取て是を破ときハ木の葉のごとくひ
その間に更に文理ととのひありて彫刻せるがごと
し石なりけれバ人多の石となづけしと云

女郎石

三河國宮地山の麓に三頭山長福寺と云寺有
當寺の境内に山の上に奇石あり女郎石といふ
その大さ人餘にして下の方窄く高さ四尺斗
假初に立たる如くにして其深さ幾ばくと云事
をしらず或人試に根を掘て見るに土となる事一丈
餘にしていまだその根を見ず此相傳て云往古此
所の驛に力珠女といふ女あり大江定基 後に寂照法師と云

といふ人と契る事ありしが後に定基にすてられて後
は人を戀こがれて終に病死し其魂魄化して石と
なるといふ

神石

陸奥國會津若松の城内に諏訪大明神の社
あり其社のかたはらに神石あり高さ六尺斗にし
て幅三尺斗なり紛なく是を圓每年八月
廿七日祭禮ありこの日神石にむかひてとのりを
いへば石音て誰と云音あり且醴に芒の穂をさ
して是を供す

桂石

陸奥国衣川の南に久蔵寺といふ寺あり此寺の
檀内に老泉ありその門中に大石あり方二丈
斗其石の上に桂の樹一株ありて大さ三抱斗なる
ゆへ石の面を覆ぬゆへに桂石と呼ぬ

神代桐樹

或書に云推古天皇の御時三河国の山に神代の
桐の樹ありその長さ四十丈太さ三十二尋にして
已に半枯て中に虚洞あり本に洞の口あり其中に
龍住で時々雲霧を発し因て霧降山と云
といふ　又は桐生山とも云

龍燈松

下野国に雷電山といふ所あり其麓に池あり此池より小雨の降夜にはかならず龍燈を出す其の数幾つともなく水の上に上る是を龍燈の松と云

神山藤

續日本紀に云孝謙天皇天平寶字二年に大和国城下郡神山に藤を生ず其の藤の根に蟲蛀の文字十六あり其文に云

王大則并天下人此内任大平臣守
昊命

斯のごとき文字なりと云
按ずるに神山はいまの大和国の中何国なるや其

所といふ

霹靂木

推古天皇の三十六年に河邊の臣と云人を安藝国へつかはして船を造らしむ因て安藝国へ行て船によき材木をもとめし時に一の木あり其大さ一圍あまりなりしが人々是を伐んとするに人ありて云是は名木なり古より是をきればたちまち死すと云雷電ありて其の人に害すゆへに霹靂木と号く河邊の臣の云雷天の下皇土にあらざる所なしとて人々に命じて是を伐しむその時にあたりて大雨雷電して河邊の

巨劔をさゝひに當て大なる声を挙て云雷神人夫を抱きて事なさしめよ我身を傷るべしとて倂て是をとり終に霹靂をむひ抱きてしく止む是によりて其木をとりて琴を作ると云

桐人

三才圖會に云楓の樹歳久しく年ふれば瘤を生じそのかたち人のごとくなる暴雨迅雷にあへば去れかり暗に長三五尺になる是を楓人と云或云化して羽人となるとぞ

芭蕉花

相傳て云鎌倉の浄蜜法師が菴に優曇華さきて遠近の人群集をなし二位の禅尼左近の将監をはるとして是を見せしめらるゝに芭蕉の花なりと云

大款冬

和漢三才圖會に云津軽の地の款冬は至て肥大なるものあり茎の周り四五寸其葉の渡り三四尺にして所の人是を傘にかへて暴雨を防ぐとぞ

八葉樒

丹波國船井郡大内村に楽音寺とて天台宗の寺あり當山の樒は他の樒とちがひ其梢の葉そ八枝あり故に八葉の樒と呼ぶと云

紫竹林

越後国蒲原郡彌彦庄鳥屋野に紫竹の林あり凡南北三十五間東西二十間斗なり此地ハ親鸞聖人三年居住弘法の所なり其ころいまだ帰伏せざる者多し爰におゐて聖人の携へ給ふ所の紫竹の節を地に挿で吾さてひろむる所の念佛宗の佛意に叶ハゞ此竹活生を遂べしと果して不日に盤茂して枝葉みな逆倒に生るが如く今に存す

八房梅

越後国蒲原郡白川庄小島村に小島佐五助と云人あり此庭に八房の梅あり相傳て云親鸞聖人鳥屋野に止住したまひし時民家に入たまふ其家の亭主饗應して且塩漬の梅を奉れ聖人是を喰しそなひて其核を庭園に投し我おしゆる所の法もし繁昌なさば此核活生せよと宣しと果して言葉の如く生じてその梅千葉の紅花にして一朶に八顆ありて其味もかハらず醎し人こ是を奇なりとし是を八顆の梅と云今の佐五助ハ其末孫なりと云

三度栗

越後国蒲原郡上野が原に長さ八町横十五町斗

の栗の林あり此栗一年に三度實をむすぶ相傳て
云親鸞聖人當國分田村をとほらせ給ふ時ある人の女人
焼たる栗を持て道にて奉れ安田村にて聖人
六字の名号を書て賜る　其名号今安田川の孝順寺に有りと云
大室の里に行むとせられ上野が原にて休息まし
たまひかの焼栗を喰たまひ其餘の栗を地に埋く
合法後世に昌ならば再生をせしとありけるに不日に
芽を出し果ていま栗林となると云
按るに常陸國西念寺の前にも斯の如き
栗の林ありと云

弟切草功能

相傳て云花山院（六十五代寛和年中）の朝に晴頼と云鷹飼の妙人あり
其業に精しき事あたかも神の如し自然飼所の
鷹鳥のために腸を裂れし事あれば草を採て是
に傳れば忽ち愈たり人其草の名を問ども秘
して云ざりしに晴頼の弟ありて或時是を
洩せし晴頼大きに怒て其弟を刄傷す是より人
其草の鷹に良薬なる事を知て世の名を弟
切草と名付と云

屈軼草

綱鑑に云黄帝の時一の草庭に生じて其草佞人
を見る時は是を指す号て屈軼草と云なり通

鑑前編に云聖王の時屈軼草出賢人を見ては
起佞人を見ては靡くやと云

菌之毒

五雑俎に云嘉定乙亥年徳明と云僧ありて曾て
山に於いて奇なる菌を得て帰りて衆僧と共に
是を喰ふたちまち毒に腸を死に至る者十餘
人ありしに徳明ハ人糞をなめて免るゝ事を得さ
其の中に日本の僧定心と云者あるもいま死に至
るとも身をば汚さじとて身體折裂て絶たり
死せし其の僧ハ日本相摸國元勝寺の僧にして俗
姓ハ平氏なりと云

白蝙蝠之毒

和漢三才圖會に云白蝙蝠は純白にして雪の如く
頭の上に冠ある者なり仙經に是を服して千百
歳人として死せずと云されども此方
士の誑言なり唐の陳子眞と云ものゝ白き蝙蝠の
大さ鴉の如なるものを得て是を服して一夕に
大に泄して死せしと云

齋諧俗談巻之四　終

齋諧俗談巻之五

東都　大朏東華　著

怪瓜

著聞集に云御堂の関白殿物忌の中解脱寺の僧正観脩陰陽師清明醫師忠明武士義家の朝臣かこもりて侍る五月一日南都より早瓜を献ぜる者あるに物忌の中たやすく取用ゐるべしとて清明に仰て是を占しむるに占て云一つの瓜に毒あらんと則僧正念誦加持せさせしハ瓜動揺せり忠明其の瓜を取て[illegible]に見て則針を二所に立れば瓜動かず義家腰刀をぬいて瓜を割ば

見人あるに其中に小さき蛇ありて蟠て死り汁ハ蛇の両眼に刺とり蛇の頭ハ切れてまとり四人ともに名を天下に鳴る者の奇ある事斯の如しといふ

按ずるにこの事元亨釋書などにも出てすこしく異同あり

犬盡忠

相傳へて云往昔河内國餌香の河原にありし斬れし人ある數百の頭身ともに爛く其姓字を知がたし但衣服の色を見て其ひとびとを取納むまれにその中に桜井の田部の連膽渟と云人の飼ある犬ひとりれ側に伏しかたく守て納めしむ既に至まてハそのち

起てゆくと云り日本紀に云守屋が家臣捕鳥部の萬が飼し白犬主の屍頭をくはへ守て其側に死せしと云太平記に云畑六郎左衛門が飼ところの犬其名を獅子と云闇夜に敵軍を侵れに犬すべて陣中へ入營衛の隙をうかがひをしすに帰て尾を揮て是を告このゆへに捷を得るといふ

捜神記に云呉の孫權の時に李信純といふ者あり一疋の犬を養ふ其名を黒龍といふ甚だ愛す李信純或時大いに醉て叢に臥しに其そばへ大守猟に出る火を放ちけるに犬をどりまわりて焼すひ信純犬の其る事をたびたびこれを見て口そへ衣を加へ引とゆく

とも信純ハ動かバ其近きに濱ありかの犬走て行て濱水に入て己が身を浸し来て信純が臥する所を巡りて其身にそゝぐる水を灌ぐ爰におゐて主人の火難をまぬかるゝ事を得たり去ども犬ハ水を運に困じ労きて側に倒れ死す信純醒て黒龍既に死て遍身毛の濡たるを見て大に訝る太守是を聞給ひて哀れミ歎き給ひて云犬の恩を報ずる事人よりも甚し則命じて棺槨衣衾を備て厚く葬れ今紀南に義犬堂と云ありて高十餘丈と云

塚本狐

河内国丹北郡布忍村に俗にのくせと云塚本狐と云あり里諺に云和泉国信田の狐ハ牝狐なり河内国塚本狐を牡狐なりゆへに此所より信田へ通ふと云ふ

貉成怪

日本紀に云推古天皇の三十五年に陸奥国に貉ありて人に化て歌をうたふと云

馬生角

捜神記に云漢の文帝の十二年呉の地にて馬に角を生る事ありその角耳の前の上にありて右にむかふ長さ三寸左の角長さ二寸ともに太さ二寸是臣不

頃の妖なりとぞ

黒眚

元禄十四年大和國吉野郡の山中に獣あり其形狼に
似て大きく高さ四尺ばかりにして長さ五尺斗あり
白黒赤色斑の数品にして尾ハ牛蒡の根のごとく鋭さ
頭喙尖りて上下の牙おの〳〵二ツ鼡の牙のごとく歯ハ
牛の如し眼ハ竪にして瞬ぬくし水かきあり走れバ
事飛がごとく是に觸るゝ人の面手足などを喰ひ咽を傷る
とし是によつて時ハ其ハ倒伏せず喰ひつして去る
弓鉄炮にて是を留る事あたはず故に落穴を用て
数十疋を捕る其後この獣なし是を俗に黒眚と

いへる志於字と云
霞澤長語に云大明の成化十二年に京師に獣あり
其かたち狸のごとく大さ犬の如くにして其疾きこと風
のごとし人の面に傷け或ハ手足を嚙ム一夜に数十
疋發る其の發る時ハ黒氣を負て来る俗に黒眚と
名付と云

大熊

相傳へて云近き頃津軽の山中にて一の大熊を捕
ふり其掌の大さ三尺爪の長さ一尺斗體の毛ハ
皆ぬけて兀なり誠に希有の大熊なりと云

胡獱

肥前の海中に胡獱といふものあつて其形および氣味、
ともに膃肭臍に似て大なり但し其歯を見て是
なり膃肭臍は下歯二行あり胡獱は歯の並常の
如し好んで眠る常に水の上にて寐ると云

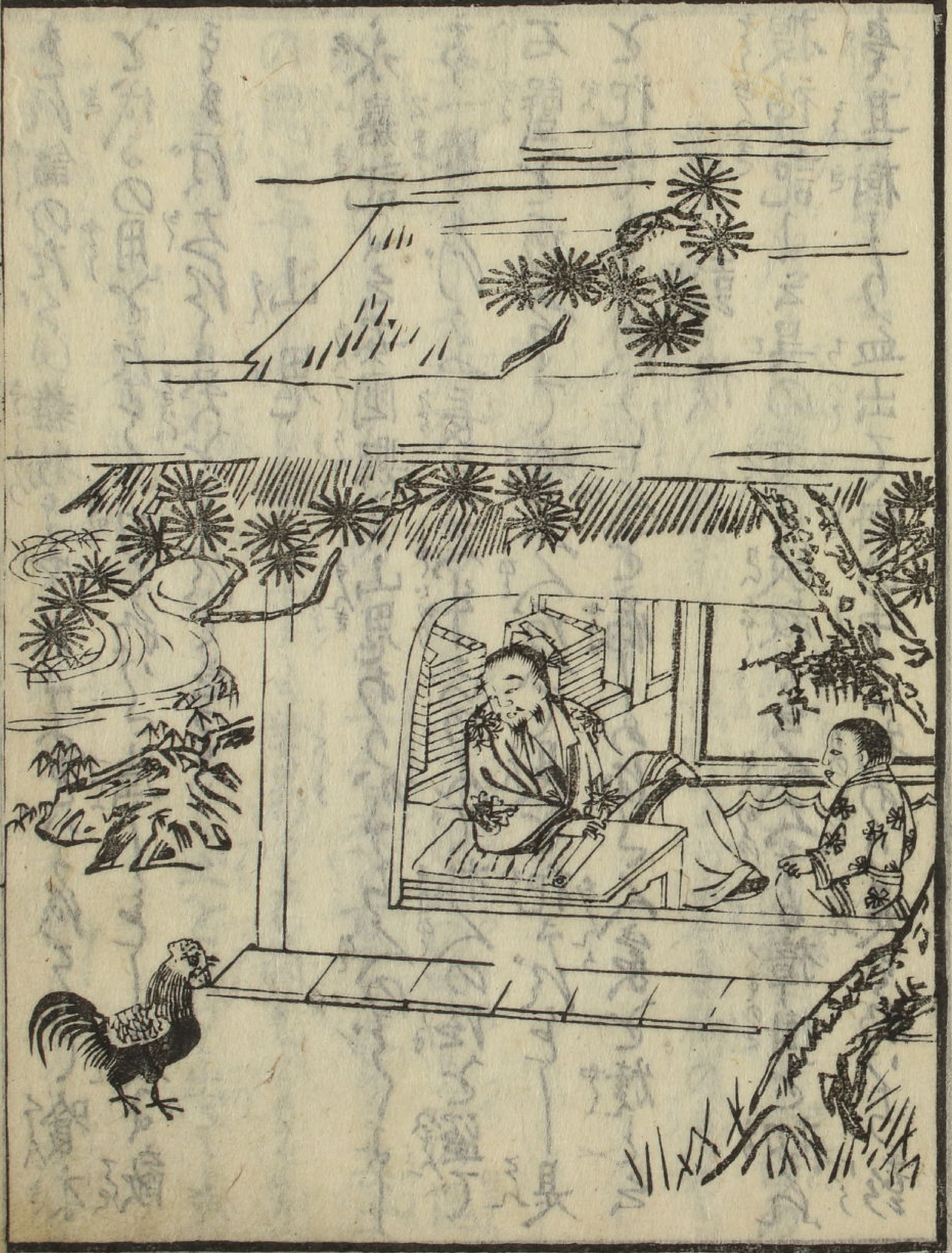
海中鼠

著聞集に云安貞の頃伊豫國矢野保の浦に嶋あ
り黒嶋と名付く人家を離るゝ事凡一里ばかり
漁人ありて名を桂裕の大夫と云一日網にて数百の鼠
を引上る鼠は皆にげ去るやうにして平日かの嶋
に鼠多く田畠をあらし菓爪を喰ふ故に圃を
作る事なしと云

按ずるに本草綱目に云水鼠は鼠に似て小く
菱芡を喰ひ或は魚鰕を喰ふ或は云小魚小蟹
の化する所なりと云

麝香鼠

肥前國長崎に鼠あり俗呼で麝香鼠と云其形
常の鼠より小くして喙尖て常に庭中厨下に出
て食物を盗む全躰に甚だ臭き香ありて猫と
いへども敢て近付ず其臭を嫌て捕る事をせずその
鼠元ハめづらしく遠来外國より渡ると云然る
に長崎に而已蕃息多くいまだ餘國にある事をき
かずと云



猴王猴夫人

太明一統志に云爪哇國の山中に猿多し人是を懼れ其名を呼に胥胥と云ば則出或ハ果實をあたふれバやゝ甚大なる猴二疋出る土人是を猴王猴夫人と云而して二疋の猿喰終れバ群猴其の餘を食ふとぞ云へり

山童

和漢三才圖會に云九州の深山に山童と云ものあり其の形十歳ばかりの童子のごとく身にかき色の細き毛ありて髪長く面を蔽ひ肚みじかく脛長し能立てゆき人の言葉をなして早言なり杣人たがひに怖

これ飯のたぐひ雑物なりとあれバよくならんで喰木
を伐るの用をたすく力ありて強し是ヲ敵
さればちからの異人ともいへりと云り

山鬼

永嘉記に云安國縣に山鬼ありかたち人のごとくにし
て一脚にしてたけ長さ一尺斗なり好んで杣人の塩を盗で
石蟹をとらへて喰ふ人あへて是を犯さんとし是
を犯すときはたちまち人を病しめ又人家を焼と云

彭侯

捜神記に云呉の時に敬叔と云人大なる樟樹を切しに
其樹より血出て樹の中に物あり是をなづけて彭
侯なりと云

按ずるに白澤圖に云彭侯は木の精なり千歳の
樹には精ありて其かたち黒き狗のごとく
尾なくして人の面なりと云

土中鴬

三才圖會に云荊州の土民は冬の月田畝の中に土の塊
の圓卵のごとくなるものありて土人是を取て賣る其土
の塊をわりて見れバ中に鶯ありて羽毛そなはらず
しかるに春のはじめに羽の生るとたちまち土を破て出ると云

鴛鴦執心

大和本草に云往古ある人の猟師ありて弓をもって鴛鴦

と射るに雄の首を射切る而して翌年かの其水辺に
伐通る時鴨一羽あるを射たりしに見るに翅の内に
去年射たりし雄の首を抱きありと云へり沙石集に
云中にも下野国阿曽沼と云所に常に殺生を
好ミける者ありけり或時鷹狩して帰るに
さかひに鴛の雄を一ツ捕て餌袋に入て帰りぬ
其夜の夢に優しき装束尋常なる女房来りて
さゝ恨めしき気色にてさめ〴〵と打歎ていふやう
たてくつらしハ夫を殺させ給へると云ふ事ハさ
むしハ孫と云バ悲しき事なりてもしものをと云
なる固く論せしは

日暮れバ誘ひしものを阿曽沼の真菰隠れの獨寝ぞ憂
やうち詠て泣く〳〵去ると見へき八鴛の雌なりと
うち驚てあはれにおもひ行に朝見へきハさの雄
と嘴くひ合て雌の死せしありき是を見て発心し
出家して尋ぐく遁世の門に入けると云

赤鳥

續日本紀に云聖武帝の天平十一年に出雲国より赤
き鳥を献るとあり又越中国より白き鳥を献ると云
按ずるに白き鳥ハ間に出る事あり赤き鳥ハいまだ
見聞せざる所の希有のものなり

猲子鳥怪

日本紀に云天武天皇の七年に臈子鳥群飛して天
を蔽ぬとぞ其の後まさしの事なをいづれも天變とし
近き頃に攝津國天滿の寺院にて臈子鳥の群
飛する事數千と云事なし鳥のために林木を枯
隠るがくのごとくする事三四日なり人群集して是
を見るもあれど奇怪とし

鳳五郎

食鑑に云往古阿蘭陀國より鳥を献ず其形大鵝に
似て大きく高さ六七尺灰色にて毛あかし黄なる毛を
帶ぬ頸長く觜長く脚の掌ハ鵝に似て肥太く
よく猿および竹木を喰ぬ是を鳳五郎と云彼國の

人をも此鳥を馬のかハりに柴薪貨物を負しむと云

食火雞

和漢三才圖會に云阿蘭陀人咬𠺕吧國の火雞を貢
す彼の人呼で加豆和留と云肥前國長崎にて是を
畜ふその形雛に類して大きく高さ三四尺よく火燼
および小石を喰ぬ糞ハ炭のごとし小石なり人近付く
時ハ起て啄むとしと云

長鳴雞

函明録に云宋の處宗ハ常に一ツの長鳴雞を飼て
学問所の窓の前に養ふ後に其雞人のごとく言語
をなして處宗と論談する事終日止ず處宗これより

因て学業大に進しと云

鶚鮓

和漢三才圖會に云鶚ハ鷹の類にして毎に海中に
ある魚を捕喰ふ事飽ときハ其餘の魚を石ある
間にかくし隠して日を経て穴に入る魚喰ふ是を鶚
鮓と名付く人其の有所を知て取て是を喰ふと
云

姑獲鳥

相傳て云姑獲鳥ハ産後に死する婦人の化する所
なりと西國の人ハ云小雨の降闇夜の時出る事あり
其居る所かならず犬あまたあつまるに是を見んとすれハ其

形鴎のごとくにして大きく鳴声とはよそ鴎に似たり
能變じて婦人となり子を携て人にあふ時ハ其の
子を人に負せんとす怖て逃れバ憎寒壯熱をなし
て死に至るものあり強剛の者是を負ふ時
ハ害なし人家にちかよるに夜ふけて負する所の子か
ろくして終に物なしと云

龍升天

和漢三才圖會に云或人船にて近江國琵琶湖を
過る北濵といふ所にて暫く納涼の時に長さ尺斗の
小蛇游ぎ来て蘆の上にあがり廻旋してまた水上に
游く事十歩ばかりゆきて蘆の上へ上る事はじめの如

し斯の如くなる事数遍にしておよそ毎に漸々に長く
なり既に一丈餘におよびしが忽ち黒雲おほ
ひ闇夜のごとく白雨の降事車軸に似て天に升
りて後に其尾を見る終に大虚に入て後晴天と
なると云

出蛟

五雑組に云閩中にては不時に暴雨して山水俄に
發りて人家を漂没する事あり土人是を出蛟と名付
と云へり或は白蛟といへり漢の昭帝鈎して蛟を
白蛟を得るに其形蛇のごとく鱗甲なく頭に軟
なる角ありて牙は唇の外に出是を鮓に造て食

に甚美なり骨青くして肉紫なりしと云

霊亀

日本紀に云天智帝の九年に邑中の亀背に甲字
と書あり上に黄にして下に黒し長さ六寸許といへる
元明帝の和銅八年に霊亀を献る其長さ七寸ば
て闊さ六寸左の眼白く右の眼赤し頸に三台を著
し背に七星を負ひ前脚に離の卦ありて後脚に
一爻あり腹の下赤白の両点ありて八字を相次と云又
聖武天皇の天平元年に異なる亀を献るその
背に天王貴平知百年といふ文字ありと云又相つ
いて云清和天皇の貞観十七年肥後国より白き

亀を貢る左右の行手および群臣是を賀奉る天皇の勅
には禎符の降る事かならず盛徳に應ずと今まさに運
光華なりとて圖に写さしめ水府の使孰が為に來る
や疑らくは是青蓮の遊んかして出るならん何ぞ天の
祉を偷で己が爲とせんと曰て終に受玉ハざりしと云

三足龞

和漢三才圖會に云往昔人ありて三足の龞を得て其の
婦に命して是を煮さしむ既にかの亀を食し終て
閨へ入て臥ス暫ありて其人の形化して皆水となる唯
髪のみ残りて隣家の人是を疑ひてかの婦人謀て
殺せるなりと云ふ是を官に訴ふ時に知縣の黄廷宣も

云人吟味を遂るといへども變せざれバすなはち別に三足の
龞を取て其婦に命して前のごとく烹さしめて罪人
に是を食しむ果して其人化して前の如し故に
おのづから其獄を辨じけると云

天蛇之毒

和漢三才圖會に云錢塘にきこへし田夫ありけるに忽
癩瘡を脱て遍身潰爛まてきたり絶んとせし時に
西溪寺の僧是を見て云さまに誠の癩にあらず天蛇
の毒に當られしなりとて則秦皮の煮汁一斗を煮に
呑しむるに其日ハなをらず翌て三日の内に癒て平愈
せしと云

野槌蛇

和漢三才圖會に云深山の窠の中に野槌蛇ありその大なるものハ径五寸長さ三尺斗にしてその頭と尾と均しくして尾尖らず槌の柄なきものに似たり故に俗是を野槌と名付く大和國吉野郡の山中菜摘川晴明が瀧の邊に多し時として是を見る其口大にして人の脚をかむ坂より走り下れる事はなはださ早く人を追ぬれども坂を登りゆく事きはめて遅し故にもし是にあふ時は急に高き所へ登れバ追得事なしと云

海坊主

相傳て云西國の大洋に海坊主といふものありそのかたち鼈の身にして人の面なり頭に毛なく大なるものハ五六尺あり漁人是を見る時は不祥なりと云傳へ實して漁に利あらざれバそのとれぬと捕て殺さんとする時は手を拱て泪を流し救を願ふ者の如し因て語て云汝が命を免し此以後吾が漁に仇をなすこと勿れといへバ西に向ひて天を仰ぐ是その諾といふ形なりとて放ちやる是中華にていふ和尚魚なりと云

擁劍蟹

相傳て云山城大和両國の溪間に擁劍蟹ありける

又その擁剣蟹ハ毎年十月の亥の日にかぎりて群て
出る其土人其の日にあたりて多く是を捕るといへども
其ゆへをしらず
筆談に云閩中にハ蟹なし因て土人蟹の形状
を怪しミ乾たる蟹を門の上に掛て瘧を除る呪
されハ唯人而已これを知らざるにあらず鬼ともしる是
を知るといへるなりと云

獨螯蟹

相傳て云獨螯蟹ハ小蟹にして色白く其螯片く
なり紀伊國和哥の浦に多くあれども人を見る時ハ
走りて穴に入ぬ

鬼蟹

相傳て云元弘の亂に秦の武文といふ人攝津國兵庫の
海に入て死ス其怨霊蟹となるゆへに兵庫および播磨
國明石の浦の蟹を俗呼て武文蟹といふ其大さ尺に
近し螯の色赤く白き紋あり俗に享禄四年細川
高國三好と攝津國にて戰ふ細川が家臣嶋村何
某といふもの敵二人を脇挾て尼が崎の水中に沒死
しかるがゆへに尼が崎の浦に小鬼蟹を俗に嶋村蟹
といふ其大さ一二寸ばかり圓くして腹に鬼の面の
如き文ありまた讃岐國八嶋の浦より出る蟹を平
家蟹と名付く平家の一族沒死する怨霊蟹

ぬきあがりしるゝと云ふさて加賀国越中国より出るもの
と長田蟹と名付くと云但し長田蟹と号る事
其據とす了

大鰒

日本紀に云允恭天皇淡路国に猟をしたまふに獣
一疋をも得たまはざりし故に是を卜しむるに赤石の海底に
真珠あり其珠を嶋の神に祠たまはゞ獣を得たまはん
爰に於て蜑をあつめて海人の男狭磯と云者腰に
縄を繋て海底に入しばらくありて出て云海底に
大なる鰒あり其処光ありといひて海へ入て
探てかの大鰒を抱てうかみ出絶に息たえて死す則

其縄を下して海底を測るに六十尋あり而して海の鰒の腹を剖く真珠を得たり大さ椎の實の如し因て是を鳩の神に祠りなひて舊を志たひに果して多の獣を得たりと云

渡貝ノ氣

相傳て云車螯の氣を吐くは天晴に曇らざる夜に聞く氣を吹事あり舟人も是に逆ハざるなり其氣おそく晴きバ晴天となり早く晴る時ハ雨風となる西海の人是を渡貝と云北海の人ハ是を狐の蓑利ハりると云俗奇怪と次

貝鮹

貝鮹ハ其かたち秋海棠の葉のごとくにして文理あり大なるものハ七八寸小なるものハ二三寸乙姫貝ともいふ黄白またハ純白にして其中に小き章魚ありて両の手を殻の眉（出し両の足を殻の後に出し船の櫂竿の形をなして游くゆへに章魚船と名付く一とせ津軽の海濱に貝鮹數百ひきよりて奇なる人多く是を取るものともも怪て喰ハず試に煮て是を犬に食しめしバたち所に煩悶して死するゆへに毒ある事をしると云

人魚

六物新志并ニ蒹葭堂寄物出二見

相傳て云推古天皇の二十七年に摂津國堀江に物

ありて網に入る其うち児のごとく魚にあらず人に似たる形ある事をしるべしと云ふまた云西國大洋の中に間にありとぞ其頭婦女に似て其外ハ全く魚の身なり色ハ淺黒く鯉に類せり尾に岐ありとぞ兩の鰭に蹼ありて手のごとく肺ハなし俄に風雨せんとする時あらはると漁人網に入るといへども寄て是を捕へずと云

本草綱目に稽神録を引て云謝中玉と云人あり或時水邊を通りしにきよき人の婦人水中を出没するを見る腰より以下ハ皆魚なりと云ふまた査道と云人高麗へ使ひし時に海の中にきよき人の婦人を見れ

肘の後に紅の鬣ありと右の三物ともに是人魚なりとぞ云

琵琶湖鮎

近江國琵琶湖に大なる鮎多し志かれに此湖の鮎ハ毎年中秋の志ん月明なる夜十萬ばかりかまて竹生嶋の北の洲に出て洲の上にて跳ると土俗の云ふ此の鮎ハ辨財天の使魚なりと云

湯中赤魚

肥前國温泉山に池の中より湯の涌出る所ありと云されにその湯の中に赤き魚ありて游ぐを見ることとぞ云

聊耶代酔篇に云詔列府城の東南五十里ばかりに温泉ありて其泉の中に時々として赤魚の游泳するを見ると云

鰡變獺

和漢三才図会に云或人の云老たる鰡はかならず獺となる故に獺の胸より下に肉臼ありと云又鮎變じて獺となることもいふ但し鰡の變ずるは其首圓く鮎の變ずるは口扁し往古人ありてその半變ぜるをこれを見るといふ

豆賀夜

若狭国大嶋浦に豆賀夜と云魚あり正字詳ならず其形眼張魚に似ておし黒し大なるは六七寸許八月より十月までの間さかりに出る鮓に作て喰ふ其味はなはだ美なり

蜻蛉齧蚉

相傳て云雄略天皇四年の秋吉野川の上小野と云所へ御幸ありて獣を駈ありし帝みづから獣を射むとまちありし時に何国ともなく一の蚉飛来て天皇の臂を齧ける忽ち蜻蛉たちまち飛来て其蚉を齧殺して則飛去る帝その蜻蛉の忠ある事を感じ給ひて其地を蜻蛉の小野と呼せ給ひしと云

蜓成害

和漢三才圖會に云性古人あつて旅行する時に水に飲かるゝ水菜を喰ひなどしてあやまりて蛭を呑ぬれば腹に入て子を生し害をなし藏血を啖ふ腸いたみ色黄ばみて痩る唯路の泥に黄なる土を擂て水にひたし飲しむ教伴にしたがへば則蛭悉く下り出ると云

蠅成群

日本紀に云推古天皇の三十五年五月に蠅ありあつて空に飛事十丈斗にあつまり其鳴音雷の如しと云また齊明天皇の六年にも此怪異ありしと云

蝦蟇合戰

續日本紀に云稱徳天皇の御時神護景雲三年七月肥後國八代郡にて蝦蟇の陳列してり其廣さ七丈ばかり南にむかひて去れり日暮に及て去る所をしらずと云ふ又桓武天皇の延暦三年の五月蝦蟇二万ばかり摂津國難波の南より行池に連なる事三町斗にして四天王寺の境内に入て悉く去りぬと云ふ又古今著聞集に云後堀河帝の寛喜三年の夏高陽院殿の南の堀にて其所にて蝦蟇數千群て左右に相分れ戰ひあるひは咬殺し半ハ死ぬ斯のごとくする事數日なり京師の人行かひて是を見ると云

大蚯蚓

和漢三才圖會に云深山の中に大なる蚯蚓一丈餘な
ものあり近江國丹波國柏原遠坂村にて一日大だち
風雨して山を崩す事あり而して大なる蚯蚓二頭
出たり一ハ一丈五尺一ハ九尺五寸ありしと云
東國通鑑に云高麗の太祖八年に宮城の東に蚯蚓
出たり其長さ七十尺ありし是ハ渤海國の來投の應
なりしと云

齋諧俗談巻之五　大尾

天地造化妙用謂之神所神
致不可測豈可謂無怪異乎
故所載史傳不少怪異之説
矣齋諧俗談者其書也近来
集怪説之書多實汗牛充棟
也雖然皆俚諺虚妄而已希

其實也今也此書者史傳之中家摘其實録之而乞之圖畫予感其勤不慢而則應需圖師記徵言而以為之跋云

龜山

谷子出所藏